

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋

PROJECT 2018

IN長野



Project Report

2018

報告書

主催

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

共催

中東のための ヨハネ・パウロⅡ世財団

Organizer :

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND

Co-organizer :

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋

PROJECT 2018

IN長野

Project Report

2018

報告書

主催

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

共催

中東のための ヨハネ・パウロ II 世財団

Organizer :

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND

Co-organizer :

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST



早朝、善光寺のお朝事（お勤め）に参加したあと参道を通って帰路につく。（奥は善光寺の仁王門）

Very early in the morning, the participants are coming back from the morning prayer of Zenko-Ji. At the back, NIO-MON (one of the main gates of the Temple)



お朝事が終わって、福島貴和師を囲んで記念写真
Group picture with Rev. Kiwa Fukushima after the morning prayer.



目次 Contents

謝辞 Gratitudes	4
1 プロジェクトの主旨と概要 Purpose and Outline of the Project	6 7
2 総括 Summary of the Project	8 12
平和のメッセージ Messages of Peace	15 16
3 準備 Preparations	
1. 準備(日本とイスラエルパレスチナで) Preparations (in Japan & in Israel-Palestine)	17 18
2. 日本人参加者の事前研修 Preparatory Seminars for Japanese participants	19
3. エルサレムでの事前研修 Preparatory Seminars in Jerusalem	20
4. チャリティイベント Charity events	21 22
4 プロジェクトの経過 Daily Reports of the Project	24 27
5 収支決算 Balance Sheet	29
6 参加者の声 Feedback from the Participants	
青年参加者の声 Voices of the Young Participants	31
長野・ホストファミリーからの声 Voices of the Host Families in Nagano	56
7 名簿 Lists of names	61

プロジェクトしめくりの「絆」ゲーム。イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちはこうして友情の「絆」を実感した

Final "Bond-building Game".
Israeli, Palestinian and Japanese youth realized their bond of friendship through this game.



謝 辞

主催者 認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 と

共催者 NGO ヨハネ・パウロⅡ世財団(エルサレム)は、

イスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋 in 長野」2018プロジェクトの計画・実施に際し、あらゆる面で温かくご支援、ご指導くださった下記の団体および個人、さらにすべての支援者の方々に対し、心から感謝の意を表します。

独立行政法人国際協力機構(JICA) 駐日イスラエル大使館 駐日パレスチナ総代表部

公益財団法人三菱UFJ国際財団 信州善光寺玄証院

長野市ボランティアセンターとボランティアの方々、ホストファミリーの方々

竹内哲幽師(曹洞宗) ハンドベル・グループ ベルリンガーズ松代

聖パウロ修道会若葉修道院 カトリック吉祥寺教会

渡部朋子氏(NPO法人 ANT-Hiroshima 理事長)

鈴木信一師(聖パウロ修道会管区長)

出川展恒氏(NHK 解説委員)

家田紀子氏(ソプラノ歌手) 瀧田亮子氏(ピアニスト)

株式会社フランストラベルセンター

シャディ・バシイ氏(神田アルミーナ オーナーシェフ)

認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会
理事長 井上 弘子

ヨハネ・パウロⅡ世財団(エルサレム)
理事長 イブラヒム・ファルタス神父(フランシスコ会)



GRATITUDES

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION “HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND”, Organizer,
 JOHN PAUL II FOUNDATION (Jerusalem), Co-organizer
 of this Project ISRAEL/PALESTINE/JAPAN “LET’S MAKE A PEACE BRIDGE in NAGANO 2018”
 express their heartfelt gratitude to ALL THE SUPPORTERS,
 especially,

JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY (JICA)
 EMBASSY OF ISRAEL IN JAPAN PERMANENT GENERAL MISSION OF PALESTINE IN JAPAN
 MITSUBISHI UFJ FOUNDATION SHINSHU ZENKO-JI GENSHO-IN & Rev. Kiwa FUKUSHIMA
 NAGANO VOLUNTEER CENTER, HOST FAMILIES
 Rev. Setsuyu TAKEUCHI Hand-Bell Group, Bellringers Matsushiro
 SOCIETY OF ST. PAUL, WAKABA CONVENT CATHOLIC CHURCH OF KICHIJOJI
 Mrs. Tomoko WATANABE (President of NPO ANT-Hiroshima)
 Rev. Fr. Shinichi SUZUKI (Provincial, Society of St. Paul)
 Mr. Nobuhisa DEGAWA (NHK News Commentator)
 Ms. Noriko IEDA (Soprano Singer), Ms. Ryoko TAKITA (Pianist)
 FRANCE TRAVEL CENTER S.A.
 Mr. Shadi BASHIYI (Owner Chef of Al-Mina)

for their most warmhearted and effective support for the realization of THE PROJECT.

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
 “HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND”
 President Hiroko INOUE

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST
 President Fr. Ibrahim FALTAS, ofm

1 プロジェクトの主旨と概要 Purpose and Outline of the Project

主旨

本事業は、イスラエル・パレスチナ・日本の若者の間に「平和の架け橋」を築き、彼らを将来の平和の担い手、平和構築のリーダーとして育成することを目的としている。彼らに、共同生活、対話やボランティア活動を通し、「人間」「命」「平和」とは何かを考え、対立と敵対を乗り越え、相互受容と信頼のうちに友情の絆を結べる場を提供する。

日程	イスラエル・パレスチナ人：8月4日から8月19日まで16日間 日本人：8月6日から8月19日まで14日間
グループ構成	18～26歳の若者 イスラエル人 4名 パレスチナ人 2名 イスラエル国籍アラブ人 2名 日本人 6名 スタッフ 5名 (日本人 4名、パレスチナ人 1名)
活動内容	1. 共同生活 紛争当事国と日本の若者が2週間の共同生活の中で、「平和共存」の可能性や、相互理解と相互受容の大切さを体験し、友情の絆を結ぶ。日本人はとくに、敵対国の若者たちの仲介役として、「どのように平和をつくるか」、「どのように信頼関係を醸成するか」について学ぶ。 2. 国際文化交流 長野の方々との国際文化交流、善光寺での仏教体験、ホームステイ。さらにケアを必要とする子どもたちや高齢者のためのボランティア活動に参加させていただき、奉仕する心を養い、共に協力して働く喜びを味わう。 3. ワークショップと対話 長野での交流やボランティア活動の体験、とくにイスラエル・パレスチナ参加者の紛争体験を傾聴し、平和構築の具体的な「道」について考える。 4. プロジェクト成果の発信 長野と東京において一般市民のために報告会や交流会を行い、自分たちの紛争の体験や希望のメッセージを発信し、平和のために働く決意を表明する。

Purpose of our Project

The purpose of the project is to build “a peace bridge” among the youth of Israel, Palestine and Japan and to train them to become in the future peace builders as well as peace messengers. We offer them opportunities to think about the preciousness of “human life” and “peace”, through a communal life, dialogues and volunteer activities. Thus they will learn how to overcome possible confrontations or oppositions and to establish a bond of friendship based on mutual acceptance and trust.

Schedule	Israeli/Palestinian participants: 16 days (August 4 – August 19) Japanese participants: 14 days (August 6 – August 19)
Group composition	<ul style="list-style-type: none"> • Youth of 18-26 years old <ul style="list-style-type: none"> 4 Israelis 2 Palestinians 2 Arabs (Palestinians) with Israeli nationality 6 Japanese • Staff : 4 Japanese 1 Palestinian
Contents of Activities	<p>1. Communal Life The youth from the 2 countries in conflict and from Japan live in a community together and experience the possibility of “peaceful coexistence” and the importance of mutual understanding and acceptance, cultivating a bond of friendship among them. Especially the Japanese youth act as a mediator among the youth from Israel and Palestine and learn about “how to promote a peaceful world” and “how to foster the relationship of trust”.</p> <p>2. International cultural exchange They have an international cultural exchange with Nagano citizens, Buddhism experiences at Zenko-ji temple and as well as homestay experiences. They cultivate the spirit of dedication and experience the joy of working cooperatively through volunteer activities for children and elderly persons.</p> <p>3. Workshop and dialogue Sharing what they learned through the various activities in Nagano, and also sharing their personal experiences of the conflict, they try to discuss how to find a way of peace.</p> <p>4. Spreading of project results Through symposium or exchange program, they will transmit messages of hope and declare their decision to work for peace.</p>

2 総括 Summary of the Project



プロジェクトの総括

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会 理事長 井上弘子

English Translation : see P.12

はじめに

2005年にイスラエル・パレスチナ・日本の若者が小さな《平和》をつくる試みを始めてからもう13年。実に多くの方々のご支援とご理解のおかげで、ここまで続けることができた。

互いを敵視している紛争地では、相手国の人々との交流はままならない。しかも和平交渉がここ数年停滞し、2国家共存による紛争解決の道は閉ざされつつあり、今では和平達成という希望が次第に遠のいている。特に、今年強行されたアメリカ大使館エルサレム移転は、現地の情勢をますます不安定な、先行き不透明なものにしている。

そのような状況下、今年もイスラエルとパレスチナ（イスラエル国籍アラブ人も含む）の若者8人が来日した。「自由な」雰囲気の中で、平和構築を目指す日本の若者ととも「平和への道」を見いだすためであることは言うまでもない。

敵対する者同士、あるいは初対面の者たちが、寝食を共にし、共同作業を行い、ワークショップで心を開いてシェアリングをし、ディスカッションをした。この2週間で、彼らがどのようにぶつかり合い、互いの多様性を受け入れる努力をし、どのように「平和の架け橋」を築き始めたか。その結果、彼らなりにどんな「平和のメッセージ」を発信したか、ご報告させていただきたい。

1. プロジェクト準備

2018年1月、理事会でプロジェクト実施を決定した。すぐさま事務局、および現地共催団体の協力体制作りに入った。

最初の作業はプログラム作りである。「平和の働き人育成」という本プロジェクトの根本的な目標は変わらないが、内容については、昨年の反省も踏まえ、場所を長野と東京にしぼり、よりゆったりしたプログラムを組むとともに、「平和のメッセージ発信」に重点を置くものとした。

資金調達のために、いくつかの団体に助成金申請書類を提出し、支援者のご寄付を仰ぐために、リーフレットを早めに（2月）作成し、発送。またプロジェクトの広報や資金調達もかねて講演会やチャリティイベントも実施。何とか資金をまかなうことができたのは、多くの支援者からの寛大なご寄付やご協力、また三菱UFJ国際財団からの助成金のおかげである。

参加者募集については、例年よりも募集要項を早く公開し、イスラエル・パレスチナ側の応募者の一部とは、3月のスタディツアーの際に面接できるようにした。日本側は男子学生の応募が極端に少なかった。最終的に選出したのは、パレスチナ人3名、イスラエル人4名、イスラエル国籍のアラブ人2名、日本人6名である。

* 2005年の当法人のプロジェクト開始以来、ガザから初めて応募者があった。しかし、ガザのエレック検問所を通過するための、イスラエル治安当局の許可が出発当日を過ぎても保留のまま。現在の不穩

な状況の中で、ガザの人々がどれほど移動の自由を制限されているかを実感した。(来日の顛末については、活動報告のJICA P.#)

*選考されていたパレスチナ人が一人、個人的な理由で来日できなかった。

事前研修：エルサレムでは日帰りを2回実施。プロジェクトの目標の認識の徹底、文化の多様性を受け入れる準備、互いの親睦を目的とした。しかしエルサレム第1回目は、朝開始した途端、治安状況の急な悪化のため、急遽、中断。2回目は無事に終わったが、内容は十分ではなかった。

東京では1泊2日を1回実施。上記と同様の目的の他、イスラエル・パレスチナ紛争の歴史、現状の把握に主眼を置いた事前研修となった。

その他個々の準備過程については、p.17以後をご覧ください。

2. プロジェクト実施

1) 長野での活動(8月6日夕方~8月14日朝)

「平和の架け橋」を築く最初の舞台は、昨年と同じ信州善光寺玄証院の宿坊であった。紛争当事者を含めた3カ国の若者が、日本人に「平和のメッセージ」を発信することを今年のプロジェクトの主眼の一つとした。

共同生活

共同生活の目的の一つは、敵同士でも、人種や宗教やメンタリティーが違って、みな同じ人間として受け入れ合えば「平和共存」は可能だということを、肌で体験してもらうことである。そのためには協力、相互受容、尊敬、思いやり、赦しの心が欠かせない。

簡単なオリエンテーション、自己紹介、アイスブレイキングのあと、3グループに分けた。

そして、

- 1) 朝食の準備と後片付け
- 2) 掃除と洗濯
- 3) 昼食夕食のサポートと後片付けなど

日常生活の不可欠な部分について当番制にし、協力が始まった。

当初は、宿坊での共同生活も異文化も珍しく、新鮮だった。しかし「同じ釜の飯」を食べる密度の濃い共同生活は、疲れがたまってくる。もともと苦手な「時間厳守」が重荷になり、就寝・起床・集合時間

を守れない者も続出。思いやりも忘れがちになり、軋轢が生まれることもあった。

しかしこの困難な時が、彼らの成長にとって大切な糧となった。小さなぶつかり合いを通して、自分がどれほど自己中心的で思いやりのない者であるかを自覚し、「平和」への根本的な障害は何か、平和共存への道はどこにあるのかを理解し始めたからである。

ワークショップ

長野でのワークショップは多彩であった。

まずは、プロジェクトの「目的」を再認識し、共有すること。みなでその目的実現に向かって協力するためである。

次に3つのグループに分かれて話し合い、「平和達成」のイメージを描いたポスターを作った。

さらに、紛争の個人的な体験を分かち合うシェアリングの時間は、参加者同士がさらに深く結ばれる意義深いひと時であった。紛争の絶えない国に生まれ育った彼らは、それぞれ、心に深い傷を負っている。双方で、それら不条理な悲しみや苦しみ、不安や怒りや恐怖などの体験を、「敵」に面と向かって語り始めた。そして互いに「敵」の心の叫びを、尊敬と共感を持って受け止めることができた。紛争地の若者たちは、互いのことを知らなかったから互いに憎み合っていたことに思い至り、日本人の若者たちは、紛争の生々しい体験を直接、当事者から聴くことは大きな衝撃であった。このように心を開いて相手の苦しみや痛みを聴き合うこのひとは、3カ国の若者たちにとって、大変貴重な体験であった。「平和実現」への一歩は、こうした人と人との心のつながりから生まれるからだ。

仏教の体験

8日早朝、善光寺でお朝事(お勤め)に参加。若者たちは、初めて体験する仏教の祈りの荘厳な雰囲気大変感銘を受けたようだった。

また同日、竹内哲幽師(曹洞宗)から座禅の手ほどきを受けた。東洋の伝統的な修行のかたちに触れたことは、異質のものを互いに理解し、受け入れ合うための、貴重な異文化体験であった。

国際交流イベント

11日(海の日)に行われた「国際文化交流会」には、長野市民40人以上の方々が参加して下さり、楽しい国際親善の一時を過ごすことができた。中でも、

若者一人ひとりが語る「平和を願う思い」「平和への渴き」に、ご出席の方々からは感動を覚えたという反響をいただいた。長野の方々に、平和のない世界に生まれ育ったイスラエル・パレスチナの若者たちの思い、また平和構築に貢献したい日本の若者たちの決意を聴いていただくことは、まさに今年のこの交流会の最大の目的であった。

若者たちはアラブの伝統ダンス「ダブケ」、イスラエルのフォークダンス「マイム・マイム」、日本の「南中ソーラン節」、盆踊りなど、3カ国の伝統ダンスを披露し、自分たちで準備したイスラエル・パレスチナの手作り料理も味わっていただいた。さらにハンドベルグループ、ベルリンガーズ松代、ベルリンガーズ松代が演奏で、いっそう交流会を盛り上げてくださった。

それぞれが披露するダンスは、そう簡単ではなく、練習時間も十分ではなかったが、頑張っって何とか成功させた。

ボランティア活動参加

老人ホーム「ハートネット桜枝町」での、高齢者の方々との楽しい交流のひと時はとても心温まるものであった。歌やダンス、折り紙などで、言葉の壁を越えて、笑顔で心を通わせることができた。飯綱高原では、ケアを必要とする子どもたちのためのボランティア活動に参加させていただき、大自然の中で大人や子どもたちと一緒にバーベキューやフィールド・アスレチックを楽しんだ。

ホームステイ

今年もいくつかのご家族が、若者たちのホームステイを快く引き受けてくださった。丸一日を各ご家庭で過ごして、玄証院に戻って来た彼らの顔は喜びと満足感でいっぱいだった。ある若者が言うには「今までの人生で一番楽しかった!」とか。言葉の壁など関係なく家族の方々や小さな子どもたちと思う存分楽しんだこの一日は、生涯忘れがたい思い出になると言っていた。

若者たちが長野で、大自然の美しさを味わい、ホームステイやイベントなどを通じて日本の文化の素晴らしさや人の心の温かさに触れる活動ができたのは、長野市ボランティアセンターを介して集まってくださった多くのボランティアの方々のおかげである。

2) JICA東京国際センターでの活動 (8月14日～19日)

ワークショップ

まず、長野での活動全般(共同生活、ワークショップ、ボランティア活動、交流会)を振り返り、反省とともにその成果を確認し、共有した。嬉しかったこと、楽しかったこと、苦しかったこと、悲しかったこと、口惜しかったことなどを本音で話し合う過程で、さらなる信頼醸成をはかった。さらに各種のワークショップをとおして、合意形成の仕方を学習し、紛争解決の方法《1 国家解決か、2 国家平和共存か》などについて議論を深めた。

また、支援者の方に助けていただいて、日本の文化として書道を紹介し、各自、毛筆で「平和」という漢字を書くことに挑戦してみた。さらに漢字の成り立ちの説明を聞き、ヘブライ語の成り立ちにも共通点があることを知って興味深そうだった。

最後に、このプロジェクトで自分が得た実りをまとめ、レポートを作成した。(報告書 P.31 参照)

*ガザからの参加者

本プロジェクトとしては初めてガザから一人の青年が参加することになっていたが、8月15日夜、スタートから遅れること10日、ようやく東京に到着した。イスラエル治安当局から北のエレッツ検問所通過許可がなかなか出ず、南のラファ検問所を通過してエジプト経由で数日かけて来日した。大変な苦勞をして《仲間》に合流できた本人も、彼の旅の無事を祈りながら待ち続けた他の参加者たちも大喜びだった。不思議なほど自然にグループに溶け込み、ディスカッションやワークショップにも、まるでずっと一緒にいたかのように積極的に参加していた。

シンポジウム

プロジェクトの集大成として最終日の午後、支援者の方のために「報告会」を開催した。活動のあらましとその成果を、パワーポイント(画像や動画)を使って報告し、また各自の「平和のメッセージ」を発表した。JICAでの活動から得た実りを踏まえて、長野でのメッセージをもう一度見直したメッセージである。聴衆の反応はさまざまで、3カ国の青年たちの「平和をつくる試み」のメッセージに「良かった」「感動した」という反応があった一方、メッセージにあまり緊迫感がなく、一般的なものを感じたというご意



テルアビブからの長いフライトのあと、日本人参加者と大宮駅で合流。いざ長野へ。

The participants from Israel and Palestine meets for the first time the Japanese participants. They are leaving for Nagano.

見もいただいた。

次いで3カ国の伝統ダンスを披露した後、休憩を挟んで、プロジェクト参加者とご出席の支援者が3つのグループに分かれて、活発なディスカッションや質疑応答が行われた。

支援者の方々に、こうして平和を願う紛争国と日本の若者たちの生の声を聴いていただき、友情の絆で結ばれた姿をお見せすることができたことを喜んでいる。

フェアウェルパーティー

フェアウェルパーティー（お別れ会）には、3カ国の若者全員、ゆかた姿で参加。特別に来てくださったボランティアのおかげで、全員に着付けをすることができたのだ。初めてきれいなゆかたを着た彼らは、喜々として街を歩いた。会場は「しゃぶしゃぶ食べ放題」レストラン。食べ放題というレストランは、イスラエルにもパレスチナにもないので、若者たちは大喜び、みな満腹になるまで食べた。

終わりに

こうして今年も、イスラエル・パレスチナ・日本の青年の心に小さな「平和の種」を蒔くプロジェクトが終わった。わずか2週間ではあったが、彼らは共同生活やワークショップ、ボランティア活動や人々とのふれ合いを通して、実に多くのことを実践的に学んだ。顔と顔を合わせ、心を開いて話し合えば、たと

え敵対関係にあっても、文化や宗教やメンタリティーが全く違ってても、信頼関係を築いて平和に暮らすことができることを体験した。もちろんすべてが容易だったわけではない。誰も完全な人間はいない。自分の限界も相手の限界も認識してさまざまな困難な状況にぶつかったからこそ、それを乗り越えるためにはどうしたらよいかを互いに助け合って学んだ。

混沌としている中東情勢、イスラエル・パレスチナ問題もますますもつれて解決の糸口が見えづらくなっている中では、私たちの試みは全く取るに足らないものかもしれない。しかし、次世代の平和を担うのは今の若者であることは確かである。日本で、困難を乗り越えて「平和の架け橋」を築くという貴重な体験をした若者たちは、積極的に自分の周囲や後輩たちに伝えていく「平和のメッセンジャー」になろうと決意している。

2005年以來、当法人の青少年国際交流事業に参加したイスラエル人とパレスチナ人を合わせて100人以上、日本人も約120人はいる。中には外交官になった者、実際に難民キャンプや紛争地で国際援助に携わる者、平和の学問を続ける者などいれば、ごく普通に職業を持ち、家庭生活を送っている者もある。彼らがどこにいても、何をしていても、このプロジェクトで、彼らの心に蒔かれた平和の種が、どんな形であれ、いつかどこかで、芽を出し、花を咲かせ、豊かな実を結んでくれるにちがいない。

Summary of the Project

Hiroko Inoue

Chairperson of Certified non-Profit Organization "Helping Children in the Holy Land"

Foreword

Our attempt to sow seeds of peace has marked its thirteenth year since we began in 2005. We have been able to continue our projects thanks to the support and understanding of numerous donors.

In a conflict zone dominated by animosity, interaction with the other party is almost impossible. To make the situation worse, peace negotiations have been stagnant for the past several years, the possibility for a two-state solution has diminished, and hope for peace has become extremely precarious. In particular, the opening of the U.S. embassy in Jerusalem has made the local situation more unstable and unclear.

Under such conditions, eight young individuals from Israel and Palestine, including Arab Israelis, arrived in Japan. They came seeking paths to peace together with Japanese students who aspire for peacebuilding, in a free and safe environment.

These enemies and strangers lived together, cooperated, shared feelings through workshops, and engaged in discussions. I would like to report on how the participants spent the two weeks and eventually began to build a "peace bridge." They disagreed, made efforts to accept one another, and sent out their messages for peace.

1. Preparatory Period

In January 2018, the Board decided on the implementation of the project. Soon we contacted local co-hosting organizations to initiate preparation.

The first task was to organize the project program. Our fundamental goal of producing "workers of peace" has been consistent. However, based on the reflections on last year's program we narrowed down the project sites to Nagano and Tokyo, planned a less hectic schedule, and specifically prioritized the purpose of "dispatching messages for peace."

To finance the project, we applied for subsidies from several organizations and sent out pamphlets to our donors in February. Additionally, we hosted a speaking event and a charity concert. We were able to raise enough money, thanks to substantial

donations from our supporters and a grant provided by the Mitsubishi UFJ Foundation.

We began the selection process earlier than usual, so we could interview the Israeli and Palestinian applicants during the study tour in March. Very few men applied from Japan. Consequently, we selected three Palestinians, four Israelis, two Arab Israelis, and six Japanese participants.

*A Gazan applied to join the project for the very first time in our history. However, Israeli authorities did not grant him a permit to pass the Erez checkpoint even after the departure date. We realized how limited the freedom of movement for Gazans is, under the current disquieting political situation. (Refer to Project Report P. for his arrival situation)

*One of the Palestinian participants could not join the project due to a personal reason.

Preparatory seminars: Two all-day seminars were held in Jerusalem. The seminars aimed to achieve a thorough understanding of the project's objective, to prepare for intercultural communication, and to get to know each other well. However, the first seminar was abruptly interrupted by the deterioration of public safety. The participants were able to complete the second seminar, but the content was insufficient.

In Tokyo, a seminar was held over-night. Its contents were planned around understanding the past and present of Israeli-Palestinian conflict in addition to the three goals described above.

Please refer to Preparation at Office P. for other specific preparations.

2. Project Implementation

(1) In Nagano (August 6 - 14)

The first location for peace-building was the lodge at Shinshu Zenko-ji Gensho-in, as last year. The main purpose was to disseminate the "message of peace" among Japanese people through the words and actions of the young participants from three countries, including the two warring parties.

Communal Life

One of the purposes of experiencing communal

life is to learn the possibility of “peaceful coexistence.” Living together is possible despite different ethnic and cultural backgrounds, if they accept one another as equal individuals. Cooperation, mutual acceptance, dignity, compassion, and forgiveness are all necessary to achieve this end.

After a short orientation session, self-introduction, and ice-breaking activities, the participants were divided into three groups. They would share the daily chores such as 1) preparing breakfast, 2) cleaning and laundry, and 3) helping making lunch and dinner.

In the beginning, everything was new and exciting for the participants. However, living and eating together all the time began to stress many of them. As a result, punctuality was undermined: some began to get up and/or appear late. Some forgot to be patient with others, and there were times of minor conflicts.

However, this time of difficulty was a crucial moment of their mental growth. Through small conflicts, they reflected upon their selfishness and close-mindedness and started thinking more about how to eliminate fundamental obstacles to achieve peace. They slowly understood how to construct the path to peaceful coexistence.

Workshops

The workshops in Nagano were very diverse. (distinct, varied)

First, all the participants confirmed and shared the purpose of the project. This step was indispensable to take cooperative steps towards the realization of the goal.

Then, the participants broke up into three groups, talked together and then created a poster that represented their image of the “achievement of peace.”

The sharing session, where the participants delivered their personal experiences of the conflict, was truly a meaningful occasion. They came to feel deeply connected with one another. These young men and women, growing up in a country torn by ceaseless conflict, carry acute pain and struggles with them. In Nagano, they were able to communicate this irrational pain and anger towards their “enemies.” At the same time, they also accepted and respected their “enemies’” feelings. The Israeli and Palestinian participants, on the one hand, came to understand that they had hated each other only because they did not know each other. The Japanese participants, on the other hand, were

able to come to accept the shocking truth of the conflict through vivid story-telling. It was truly an important experience for all participants to open up and listen to one another. These interpersonal connections are just the sort of small steps that lead to the construction of peace.

Experiencing Buddhism

Early on the morning of August 8th, the participants joined the Morning Prayers (Otsutome) at Zenko-ji. They were all impressed by the awe-inspiring atmosphere of Buddhist prayers.

On the same day, they experienced Zazen with the guidance of Rev. Setsuyu Takeuchi, a Sotoshu priest. Experiences of a distinct culture, for the participants, were a significant step toward understanding and accepting foreign and unfamiliar things.

International Exchange Party

We hosted an “International Cultural Exchange Party” on August 11th. More than forty people from Nagano city participated, and we all shared an enjoyable moment of international goodwill. In particular, individual messages for peace delivered by each participant were positively received by the audience. We were able to achieve the primary purpose of the exchange party: to communicate to the people in Nagano the messages from Palestinians and Israelis who grew up in a peaceful environment and to express the determination of the Japanese participants to contribute to peace-building.

The participants danced a traditional Arab dance, the “Dabke”, an Israeli folk dance, “Mayim, Mayim” and the Japanese “Nanchu Soran Bushi” and Bon dances. They also offered hand-made Israeli and Palestinian food. A hand-bell choir from Nagano joined the party as well.

Each dance was not easy and the participants did not have enough time to practice, but in the end they were able to complete and present the dances.

Volunteering Activities

The participants had heartwarming interactions with the elderly at a nursing home, Heart-Net Sakurae-cho. Through songs, dance, and folding origami, the participants and the elderly were able to communicate, heart to heart. At Iizuna Heights, the participants became temporary members of an organization that supports children that need special attention. They all enjoyed barbeque and outdoor activities together.

Homestay

As usual, several households kindly agreed to host the participants. After spending a day at these houses, the participants were filled with satisfaction and joy. Some said that it was the best day of their life. To these young people, the day spent with a Japanese family and children, regardless of the language barrier, was a memorable experience.

This was all due to the kindness and hard work of the volunteers who had gathered through the Nagano Volunteer Center; they enabled the participants to experience the beauty of nature and Japanese culture through homestays and various events.

(2) At JICA Tokyo International Center

(August 14 – 19)

Workshops

First, the participants did a reflection on the activities in Nagano, including communal life, workshops, volunteering activities, and cultural exchange events. They confirmed and shared achievements and things to be improved. This reflection session aimed to deepen mutual trust among the participants as they shared their happy, fun, difficult, sad, and frustrating memories. Then, through two kinds of workshop, they learned how to reach consensus and debated about the solutions to end the conflict (one-state or two-state solutions).

Additionally, with the help of our supporters, the participants learned to write HEIWA ('peace' in Japanese) with a Japanese writing brush. They learned the history of Kanji and found interesting commonalities between Japanese and Hebrew letters.

In the end, they wrote a summary report on the personal achievements they made throughout the two-week project. (Please refer to p. for these individual reports.)

***The Gazan participant:** A first-ever participant from Gaza arrived in Tokyo the night of August 15, ten days after the project had started. The Israeli authority had not allowed him to pass the Erez checkpoint in the north, and he therefore went through the Rafah checkpoint and Egypt. It took him several days to arrive in Japan. He and his friends were delighted to see each other. He naturally blended into the group and joined the discussions and workshops as if he had been with the group the whole time.

Symposium

As the main concluding event of the project, we held a symposium in the afternoon of the final day. The participants gave presentations on the activities and their achievements using slides, photos, and videos. Additionally, each of them delivered a short speech on their desire for peace. After the activities in JICA, the participants rewrote the speech they had delivered in Nagano. The audience responded in various ways: some were moved by the words of the participants, but some said the speeches were general and lacked a sense of urgency.

After this the participants danced traditional dances and proceeded to a discussion session with the guests in small groups.

I am grateful that the guests were able to hear the young participants' hopes for peace and to witness the friendship that had been nurtured among them.

Farewell Party

All the participants joined the farewell dinner wearing a yukata, thanks do the volunteers who were present to help them. The Israeli and Palestinian participants, wearing yukata for the first time in their lives, joyfully walked around the city. Dinner took place at an all-you-can-eat Japanese restaurant. The Israeli and Palestinian participants enjoyed it and ate quite a bit; they had never seen an all-you-can-eat restaurant in their home countries.

Closing Remarks

This year's project to sow seeds of peace in young hearts and minds came to an end. Within just two weeks, the Israeli, Palestinian, and Japanese participants learned substantial practical lessons through communal life, workshops, volunteering, and interactions with people. They learned from their experiences about the possibility of living peacefully through face-to-face and heart-to-heart communication, regardless of differences in religion, culture and mentality, despite long-standing antagonistic relationships back home. Not everything was easy. There is no perfect human being. However, the young men and women were able to learn how to overcome difficulties and accept one another's limitations.

Our attempts to build peace on an individual level may seem insignificant compared to the chaotic political situations in Israel, Palestine, and the Middle East in general. However, it is certain that these young individuals are in charge of the

next generation. The participants, after overcoming various difficulties and building a “bridge of peace”, are determined to become “messengers of peace” who spread their special experiences among their family and friends.

Israelis and Palestinians who have joined our youth international exchange program now

number more than a hundred people, Japanese participants around 120. Some of them have become diplomats, workers at refugee camps, international development officials, scholars, and company employees. No matter where and when it may be, the seeds of peace sown in the project will sprout, grow tall and bear abundant fruit.

プロジェクト参加者の 平和メッセージ

まとめ：村上宏一

今年のプロジェクトでは、参加者たちに「平和の架け橋」にふさわしい平和の担い手としての決意を持ってもらい、それをメッセージに込めてもらうことを目標の一つとしました。「自分に何ができるだろうか」と、手探りしながらのメッセージ作り。訪日組は、地元に戻ればイスラエル側との、あるいはパレスチナ側との交流に否定的な反応にもぶつかることが考えられ、難しい作業だったと思います。生まれ育った環境を綴ったり、身近な体験を振り返ったりしながら共通して訴えているのは、「互いの違いを認めること」です。

メッセージの中身を少し見てみましょう。

身の回りの状況について、「友人や家族と話すとき、平和の実現は難しいと思うのか、だれもがそんな話題を避けたがる」というイスラエル国籍アラブ人のI君「だれもがより良く生きる権利というのは夢想だとは思わないし、それを想像し続けることが僕の責任」と語ります。

同じくイスラエル国籍アラブ人のAさんは、バイト先の喫茶店で、ある女性客にトイレを教えたところ、そこは爆弾が仕掛けられているかもしれないから別の個室を教えろと聞かれた経験を引き合いに出しました。そのトイレはイスラム教徒の服装をした女の子が使ったもので、人を見かけだけで判断することにショックを受けたと言い、「私たちは偏見や先入観で人を見ないこと、違いを理解することから始めなければならない」と訴えます。

相手を知ろうとすること、そのために重要なことの一つは教育だとパレスチナ人のNさんは言います。「ユダヤ、パレスチナ双方が相手についての教育をし、互いに知り合い理解を深め合うべきだ」というのです。パレスチナ難民キャンプで合唱の指導などを行っているNさんは、自身もかかわる音楽活動の経験から、中でも音楽教育は有効だと指摘。イスラエル人とパレスチナ人合同のオーケストラや合唱団が醸し出すハーモニーは、相互理解を深めるのにふさわしいと言います。

これからの行動にどう結び付けていくか。それは容易なことではないでしょう。しかし、イスラエル軍で多くの軍事作戦に参加したというO君は「イスラエルとパレスチナの紛争は長すぎた。我々若い世代が良い方向に変えるべき時だ」と明言。「自分の話を聞いてくれる人たちにプロジェクトの体験を伝え、『目を開き、心を開いて互いに相手側の言うことに耳を傾けよう』と訴えたい」と述べます。

事務局としても、プロジェクト参加者たちが自国の高校などへ出かけて体験談を語る、といった試みができるような環境づくりを考えたいと思っています。

日本人参加者の場合は、Mさんが「日本には安心や安全が当たり前のようにあり、行きたい所に行けて、買いたいものが買えるという生活を送っている人が多い」と述べ、S君が「紛争の当事者でもない日本人が、イスラエルやパレスチナという国となんの関係があるのかという素朴な疑問を持つ人もいます」と語るように、戸惑いを見せながら、自分たちに何ができるかと自問自答しています。そのうえで人は皆、見た目や考え方、好き嫌いなど何もかもが違う。その違いを理解し、受け入れることが平和への一歩

だ」(Mさん)と、紛争の現地から来た若者たちと同じ思いに至ります。

そして「この(プロジェクトに参加した)2週間で明らかになったのは、他者への共感を働かせることで、それぞれの痛みを受け止め前に進むことができ

たこと」(S君)に確信を得て、「私は今後、新たな人との繋がりができるたびに平和について語るでしょう。子供たちに対して、紛争の中で抗う人々のことを語ることもできます」と決意を述べています。

Peace Messages of the Participants

Summary by Koichi Murakami

One of our project's goals this year was for the participants to gain the resolve to deliver their messages as bearers of peace. We wanted them to feel like they could do anything as they crafted these messages. When I spoke with Japanese locals, they wondered whether some of the participants on either the Palestinian or Israeli side would feel uncertain about such an exchange. But when you can reflect on your shared experiences, you can begin to acknowledge and appreciate your differences as well.

Why don't we take a look at some of the messages?

A young Arab from Israel wrote, "When speaking with friends or family, we avoid talking about whether it's possible to realize peace." He adds, "It's my responsibility to continue believing that anyone's right to a better life is not simply a dream."

Another wrote that one time, at the coffee shop where she works, upon receiving directions to the toilet her customer demanded to be placed in a different room because they suspected that a bomb had been planted. She was shocked to discover that her customer merely saw that a girl in Muslim dress had just used the toilet. In her message, she argues, "We have to let go of our prejudices and begin understanding the differences between people."

A Palestinian participant wrote that greater education is necessary in order for people to know about others. "We should be taught about each other so that we can understand each other as well," she wrote. A director of a chorus at a Palestinian refugee camp explained that from her experience directing musical activities, musical

education could also be effective. She believes that the harmony that comes from performing together in a band or choir gives birth to a greater mutual understanding.

How do we move forward from here? Surely, it won't be easy. However, a young man who had participated in a number of Israeli military operations states, "The conflict between Israel and Palestine has gone for too long, and it's about time that we turn to the younger generation to lead us in a better direction." He adds, "When people ask me about my experience here, I want to tell them, 'Open your eyes and open your mind, and listen to what others have to say.'"

As the secretariat, I would like to think about how we can create a means through which the participants can share their experiences here with young students at their home countries.

The project's Japanese participants also had much to say. One participant Ms. M explains, "We take the safety and peace in Japan for granted. Many people here live life without worrying about where they can go or what they can buy." Another participant Mr. S adds, "Living in a place so removed from the conflict, there are definitely Japanese people who naively wonder why Israel and Palestine should concern Japan at all." I wonder myself, sometimes, what we can do as Japanese people. But as Ms. M also writes, "Understanding that everyone has different ideas and ways of thinking, and that they have different likes and dislikes, is at least one step towards realizing peace." I hope that we can take away some of the lessons that our young guests have over the course of this project.

"I realized over the course of these two weeks, as I sympathized with the stories of the other participants, that I can learn and move on from my own pain as well," Mr. S adds. "We can tell our children about the struggles of people around the world, and we can teach them how to share their own messages of peace."

3 準備 Preparations

1. 準備 (日本とイスラエル・パレスチナで)

実施月	準備	活動の概略
1月	プロジェクト 実施決定	NPO法人理事会においてイスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋in長野2018」実施を決定。共催団体は例年のとおり、ヨハネ・パウロII世財団。今年は、長野と東京での共同生活、対話、国際文化交流とボランティア活動、とくに平和のメッセージ発信に重点を置く。
2月～5月	協賛・後援の 申請	JICA、駐日イスラエル大使館、駐日パレスチナ総代表部
	宿泊施設、セミナー ルーム、交流会 会場などの予約	信州善光寺玄証院の宿泊許可(8月6日～14日)。長野ボランティアセンターのホール予約(8月11日)。JICA東京国際センター (8月14日～21日)：宿泊、セミナールーム、講堂などの予約。
2月～8月	支援金募集 助成金申請	プロジェクトのポスターおよびチラシを作成。支援者や支援団体へ送付。数団体に助成金を申請。三菱UFJ国際財団から70万円の助成金交付決定。
4月～6月	参加者募集と 選定	インターネットあるいは口コミなどで、参加学生募集。 現地共催団体 ヨハネ・パウロII世財団と共に、イスラエル・パレスチナから招聘する若者(9名)を選定、また日本の学生(6名)も書類審査、面接を経て選定。
4月～7月	交通手段の 準備	イスラエル・パレスチナ人のための航空券を購入。 国内交通手段を確保(東京～長野の新幹線を含むJR乗車券、長野～新宿の路線バス切符購入、現地でのレンタカー予約など)
5月～7月	ビザ手続き	パレスチナ人の日本入国ビザを取得するための書類作成、エルサレムへ送付。テルアビブの日本大使館へビザ申請、受け取りのために現地スタッフが数回訪問。
6月 23～24日	事前研修 (日本)	日本人参加者のため、JICA東京国際センターにて事前研修を実施。 (イスラエル・パレスチナ紛争への理解を促進)
5月13日、 6月10日	事前研修 (イスラエル・ パレスチナ)	エルサレムにおいて事前研修を2回実施予定。第1回目は集合直後、エルサレムの非常事態のため中止。第2回目は予定通り実施。 プロジェクトの目的を再確認し、参加者同士の親睦を深めるのが目的。
7月 1日、16日	チャリティー・ イベント	1) 出川展恒氏 (NHK解説委員) による講演会 「イスラエル・パレスチナ紛争の行方」 2) 「イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ」 (いずれも約80名が参加)
8月上旬	直前準備	食料品、医療品、雑貨などを購入し、長野の玄証院に送付。 Tシャツ、旅のしおり、名札などを作成。

1. Preparation (in Japan & in Israel-Palestine)

Month	Heading	Detail
January	Decision to carry out the project	The executive committee decided to implement the project. "JOHN PAUL II FOUNDATION" was to be the co-organizer as usual. Main activities in Nagano and Tokyo will be cultural exchange, volunteer works, dialogues and sharing, communal life, putting emphasis on giving peace messages to Japanese people.
February- May	Application for sponsorship	Obtained approval from JICA, the Embassy of Israel and the General Mission of Palestine.
	Reservation of accommodation, seminar rooms etc.	Zenko-ji Gensho-in: Accommodation (August 6-14) Nagano Volunteer Center: Reservation of the Event Hall. JICA Tokyo International Center (August, 14-21): Reservation for accommodation, seminar rooms and Hall for symposium.
February - August	Fundraising	Made posters and leaflets to collect funds, started distributing materials to supporters and supporting organizations. We are granted a subsidy (¥700,000) by Mitsubishi UFJ Foundation.
April - June	Recruitment	Recruitment of participants through internet as well as NPO's connections. Selection of nine members from Israel and Palestine in collaboration with the co-organizer "JOHN PAUL II FOUNDATION". Selection of 6 Japanese members through application documents and interviews.
April - July	Reservation of transportation	Purchase of flight tickets for Israelis and Palestinians. Reservation of transport facilities in Japan; tickets of JR from Tokyo-Nagano, tickets of bus from Nagano to Tokyo and a rent-a-car.
May - July	Application for Visa	Preparation of documentations to obtain Palestinians' entry Visa to Japan, sending them to Jerusalem. Local staff went to the Embassy of Japan in Tel Aviv several times to apply for and receive visa.
June 23 - 24	Preparatory Seminar (for Japanese)	At JICA Tokyo International Center, preparatory seminar for Japanese participants to learn and understand about the conflict between Israel and Palestine and the peacebuilding.
May 13 & June 10	Preparatory Seminar (for Israelis and Palestinians)	Preparatory seminars held twice in Jerusalem for Israeli and Palestinian participants with the purpose of reconfirming the aim of this project and learning about Japan and promoting friendship. But the first one was interrupted because of the sudden blockade of the City of Jerusalem. The second one was carried out with no accident.
July 1 & 16	Charity Events	Two charity events for fundraising and PR. 1) A lecture on "the Conflict between Israel and Palestine" by Mr. Nobuhisa Degawa (NHK commentator). 2)"Friendship Party": Concert by Mrs. Noriko Ieda and buffet of Middle East dishes. About 80 audiences joined for both 1) and 2).
August	Arrangements	Purchased of foods, medical supplies and other items necessary for the activities and sent them to Nagano. Made T-shirts, booklets of itineraries and name tags, etc.

2. 日本人参加者の事前研修

2018年6月23日(土)～24日(日)、JICA 東京国際研修センターにて、日本人参加者のための事前研修を行った。イスラエル・パレスチナ紛争の歴史と現状、平和達成の展望について理解を深めてもらうためである。プロジェクト実施時の、日本人参加者は6名だったが、2名は事前研修後に参加が決定したため、4名での研修だった。

6月23日

1日目は、代表の井上が、このプロジェクトが発足したきっかけと目的についての説明をした後、参加者同士の自己紹介とワークショップを実施した。

午後には、事前課題としてイスラエル・パレスチナ

問題について調べたことを各々発表した。発表内容は、下記の4テーマ

- ・シオニズム (深田)
- ・パレスチナ難民問題 (山田)
- ・パレスチナ問題についてのイスラエル世論 (石塚)
- ・基礎情報の比較 (梶原)

6月24日

2日目は、長野での活動の紹介とワークショップ、南中ソーラン節の練習をした。

最後に、参加者がプロジェクトへの意気込みとして、決意表明文を発表した。この勉強会は、プロジェクト参加者の「平和理解」を深めるためにも大いに役立った。

2. Preparatory Seminars for Japanese Participants

Prior to the project, a preparatory seminar was held for Japanese participants on June 23th-24th, 2018, at JICA Tokyo International Center. The purpose is to help them to understand better the history of the Israeli-Palestinian Conflict, its present situation, and the perspective of the way for peace.

June 23

In the beginning of the Seminar, Hiroko Inoue, the president of the NPO, presented to the participants he history of the project, its vision, purpose and goals.

In the afternoon, each participant made a presentation on a topic that had been assigned to him/her prior to the seminar.

Presentation on 4 topics concerning the Israeli-Palestinian Conflict:

- ・Zionism
- ・The problem of Palestinian refugees
- ・Israeli public opinion about Palestinian issue
- ・Basic Information of Israel and Palestine

June 24

They understood the activities of Nagano, and they practiced Soran-bushi dance.

At last, they clarified their roles and goals of the project. This workshop was very useful for the project participants to understand better what peace is.

3. エルサレムでの事前研修

イスラエル・パレスチナからの参加者のために、現地スタッフのヤクブ・ガザウイを中心として、2回の日帰り研修がエルサレムで行われた。

会場はエルサレム旧市街のテラ・サンクタ学院をお借りした。

1) 5月13日(日)、9時30分開始。6名参加。検問所通過許可が取れなかったガザからのラミ、軍から退役後の短期再召集があったオハド、さらにエルサレム居住権について行政上の問題があったアハメドが不参加。

昼食中、エルサレムで治安を揺るがす事件が起こり、町の交通機関がすべてストップされるという情報が入ったので中断を決定、安全のため急遽全員を帰宅させることにした。その日は自己紹介とプロジェクト

の概要説明だけを行った。

2) 6月10日(日) 9時30分から16時まで。全員参加できた。この日のポイントは、ゲームなどによるアイスブレイキング、日本文化や習慣などの紹介、プロジェクト中に守るべき「行いの規律」説明、日本で踊る「南中ソーラン節」の練習など。

なかなか思うようにはいかない事前研修であった。それでも参加者たちはプロジェクトの基本的目的を共有することができた。またこれから日本で素晴らしい体験をともにするイスラエル人・パレスチナ人の新しい仲間ができて大いに喜んだ。

3. Preparatory Seminars in Jerusalem

We held twice in Jerusalem one-day pre-seminar of the Project for the participants from Israel and Palestine thanks to Yacoub Ghazzawi, our local staff. We are grateful to Terra Sancta School for offering us a meeting hall.

1) Sunday, May 13: We started at 9:30. 6 participants were present. Absent were Rami, Ohad and Ahmed who were not available this day. Unfortunately, we had to interrupt the seminar suddenly due to some security problems happened in Jerusalem in the morning. All of them hurried home after the news that all the transportation in the City would be interrupted in the afternoon.

All what we could do this day was self-

introduction and the presentation of the outline of the Project.

2) Sunday, June 10: From 9:30 to 16:00. All the participants were present. The activities were (1) ice-breaking games, (2) presentation of some aspects of Japanese culture and manners, (3) explanation of the Rules of Conduct they are supposed to follow during the Project, (4) practice of dances, especially "Nanchu-Soran".

These pre-seminars were not so easy. However, they could at least understand and share the purposes of the Project among them. And they were very happy to find new Israeli or Palestinian friends with whom they were going to have exciting experiences in Japan.

4. チャリティー・イベント Charity Events

講演会『イスラエル・パレスチナ紛争の行方』 出川展恒氏 (NHK 解説委員)

7月1日(日)、東京都武蔵野市のカトリック吉祥寺教会で、NHKの出川展恒解説委員による講演会が開かれた。テーマは「イスラエル・パレスチナ紛争の行方」で、次のような内容だった。

イスラエル、パレスチナ紛争をめぐる状況は毎年悪くなっている。最近問題になったのは、5月14日のイスラエル建国記念日に、アメリカ大使館がテルアビブからエルサレムに移されたこと。エルサレムが首都であるというイスラエルの主張を、トランプ米大統領が認めたもの。エルサレムは、パレスチナ側も将来の首都としており、移転に強く反発、和平は絶望的になった。

イスラエルは1967年の第3次中東戦争でヨルダン川西岸、ガザなどを占領した際、パレスチナ人居住区の東エルサレムを併合して「エルサレムは不可分のイスラエルの首都」と宣言した。93年の暫定自治合意(オスロ合意)では、「2国家共存」により紛争の解決を図ることのほか、エルサレムの地位は和平交渉で決めることになっており、大半の国はイスラエルの主張を認めずテルアビブに大使館を置いている。

ではトランプ大統領は、なぜあえて移転を決断したのか。背景には、国内の有権者へのアピールがある。トランプ氏の支持者で有力なのは「エルサレムはユダヤ人に神が与えた地である」と信じるキリスト教福音派の人たちで、有権者の四分の一から三分の一を占めるともいわれる。大使館のエルサレム移転はイスラエル寄り姿勢の象徴といえ、今秋の中間選挙を視野に、自身の大統領選の公約を実行したとして、岩盤支持層をつなぎとめたいという意思の表れだ。

とはいえ、エルサレムの帰属問題は宗教感情を刺激するデリケートな問題。そんなことを顧みない移転が実行された日、ガザではイスラエル軍が境界のフェンスに近づいたパレスチナ人に発砲するなどして60人が死亡、1700人がけがをした。トランプ大統領から新たな和平案はなく、パレスチナ自治政府のアッバス議長はトランプ政権との交渉に応じないと言明。イスラエル、パレスチナ双方の専門家たちから「オスロ

合意は死んだ」との声が聞かれる。

大使館移転がなくても和平交渉は行き詰まる運命にあった。理由は①交渉の仲介役は公平であるべきなのに、アメリカ政府はユダヤ人有権者の支持欲しさにイスラエル寄りになりがちなこと(トランプ政権はそれが特に著しい) ②ヨルダン川西岸で進められるユダヤ人入植(今では入植地は120カ所以上、東エルサレムでも10カ所以上になり、既成事実化で除くのが困難になっている) ③イスラエル、パレスチナ双方に和平実現への絶望感が広がっていること。

和平交渉を復活させる新たな枠組みのために必要なのは、

- 2国家共存の再確認
- 西岸でのユダヤ人による入植活動の全面停止
- イスラエル、パレスチナ双方に信頼醸成と和平支持の世論形成
- 国際社会の支援。アメリカが国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)への資金を凍結したため、難民の生活や教育に支障が出てきている。

次の世代を支える若者に相互理解の機会をつくるのが大切なのに、イスラエルとパレスチナの若者が顔を合わせるのは検問所というのが現実。互いに相手を「テロリストかも」「支配者であり攻撃者」と警戒し合う状況を何とかしなければならない。

出川展恒(でがわ・のぶひさ)
1985年、NHK入局。91～92年テヘラン、94～98年エルサレム、2002～06年カイロの各支局長を経て06年7月から中東・アフリカ・イスラム地域担当の解説委員を務める。

Lecture Meeting by Mr. Nobuhisa Degawa (NHK News Commentator) “The Future of the Israeli-Palestinian Conflict”

On July 1st (Sunday), NHK commentator Degawa Nobuhisa delivered a lecture titled “The Future of the Israeli-Palestinian Conflict” at Kichijoji Catholic Church (Musashino-shi, Tokyo).

The conflict between Israel and Palestine has seemingly been getting worse every year. Most recently as of writing, on May 14th, also Israel’s Independence Day, U.S. President Donald Trump

moved the U.S. embassy from Tel-Aviv to Jerusalem, virtually recognizing Israel's claim to Jerusalem as its capital. The controversial decision incited resistance from Palestine, which claims East Jerusalem as its capital, suggesting that peace is still far from reach.

When Israel occupied the West Bank and Gaza during the Third Arab-Israeli War in 1967, it annexed East Jerusalem from the Palestinian settlement and declared that all of Jerusalem was its capital. The Oslo Accords of 1993, also known as the "Interim Agreement," aimed to resolve the conflict through a two-state solution, with a majority of nations denying Israel's claim to Jerusalem by having their embassies in Tel-Aviv.

So why did President Trump decide to relocate the U.S. embassy? Behind the scenes, he seems to be appealing to his base in the States. Evangelical Christians, many of whom subscribe to the belief that God gave Jerusalem to the Jewish people, are said to make up from a quarter to a third of Mr. Trump's voters. His choice to move the embassy also comes in advance of this year's midterm elections, and represents his commitment to his base.

The question of Jerusalem's attribution is a delicate matter that rouses religious sentiment. On the day of the embassy's relocation, Israeli soldiers shot at Palestinians approaching Gaza's border, killing sixty and injuring 1700 Palestinians. There is no new peace plan from President Trump, nor any interest from Palestine's President Abbas to negotiate with the Trump administration. Experts on Israel and Palestine are beginning to say that the Oslo Accords are dead.

Even without the embassy's relocation, however, peace negotiations were destined to stall. Some reasons are the following. (1) Although an intermediary ought to be impartial, the U.S. government tends to favor Israel to appeal to its Jewish voters. (2) The number of Jewish settlements along the West Bank has increased in recent years. (3) More and more civilians are beginning to feel that reconciliation will be impossible.

The framework necessary to revive peace negotiations includes the following. (1) Reaffirmation of the two-state solution. (2) Reestablishment of public support for enacting peace in both Israel and Palestine. (3) Support from the international community. Because the United States has frozen its funding of the United Nations Relief and Works Agency (UNRWA), Palestine refugees have faced more hurdles to daily living and education.

We must support the next generation of young people and give them opportunities to learn and communicate with one another. We have to help them fight against the prejudices that are forced upon them about each other, since they are our future, and our greatest chance at keeping peace.

Mr. Degawa Nobuhisa joined NHK in 1985. After working as branch manager of Tehran (1991-92), Jerusalem (1994-98), and Cairo (2002-06), he has served as a commentator on Middle Eastern, African, and Muslim regions.

About the lecturer, Nobuhisa Degawa
He entered NHK in 1985, experienced the directors of Teheran branch (1991-92), Jerusalem branch (94-98), and Cairo branch (2002-06), and currently serves as a commentator on topics related to Middle East, Africa, and Islam.

出川展恒氏 (NHK解説委員) の講演会「イスラエル・パレスチナ紛争の行方」

Lecture by Mr. N. Degawa on "the Future of Israel-Palestine Conflict"



イスラエル・パレスチナ・日本 友好の夕べ

プロジェクト支援イベントの第2弾、ソプラノ歌手の家田紀子さんとピアノの瀧田亮子さんによるコンサート、および東京・神田のパレスチナ料理店「アルミーナ」によるビュッフェが7月16日（月：海の日）、四ツ谷の若葉修道院で催されました。

「私を泣かせてください」（ヘンデル作曲）、「アヴェ・ヴェルム・コルプス」（モーツァルト作曲）などの歌曲や「トロイメライ」（シューマン作曲）などのピアノ独奏を堪能。アンコール曲に「アイスクリーム」のおまけがついたところで、パレスチナ料理のビュッフェタイムに移りました。

用意されたのは、ひよこ豆のディップとでもいうべきホムス、それを丸めて揚げた感じのファラフェルといったパレスチナ料理の定番など、デザートにはヤギの乳のチーズケーキ、クナーフェ（クナーファ）が並び、集まった人たちのお腹を満たしました。

チケットの番号で当たる福引では、イスラエル産ワインやパレスチナ産オリーブ油、聖地の風景をあらわした絵皿などの景品に歓声が上がりました。

Israel, Palestine, and Japan Friendship Party

The second round of the project support event, the concert performed by a soprano Ms. Noriko Ieda and a pianist Ms. Ryoko Takita and the buffet offered by



チャリティ・コンサートを終えて。家田紀子氏（ソプラノ）と瀧田亮子 Ms. Noriko Ieda (Soprano) and Ms. Ryoko Takita (Pianist) after the Charity Concert

the Palestinian restaurant "Almina" in Tokyo / Kanda were held at Wakaba monastery in Yotsuya on 16 July (Monday: Marine day).

We had lovely time with songs such as "Lascia Ch'io Pianga" (Händel) and "Ave Verum Corpus" (Mozart) also a piano solo "Träumerei" (Schumann).

After the time we had an encore "Ice Cream", we shifted to the buffet time.

We had typical Palestinian dishes such as the dip made from mashed chickpea named "hummus" and deep-fried balls made from ground chickpeas named "falafel". Also cheese cakes made with goat milk and kunāfah were served as the dessert. Everyone was satisfied with all the dishes offered at the buffet time.

In the lottery with ticket's numbers, offer gifts such as Israeli wine, Palestinian Olive oil and a plate decorated with the holy place were prepared and everyone was squealed for joy.



長野・玄証院でのワークショップ
Workshop at Nagano, Gensho-in

4

プロジェクトの経過 Daily Reports of the Project

第一部 長野での活動 8月6日(月)～13日(月)

8月5日(日)

夜：イスラエル・パレスチナの参加者7名とスタッフ（ヤクーブ・ガザウイ）がテルアビブから成田空港に到着。空港近くのホテルに宿泊。

めの確認作業

午後：ボランティア活動 デイサービスセンター ながでんハートネット桜枝町を訪問。とても楽しい交流ができた。プロジェクト参加の若者もお年寄りも大喜び。

ダンス練習 近くの「城山公園」で。

夕方：フリータイム

8月6日(月)

イスラエル・パレスチナの参加者、成田空港からバスで大宮へ。大宮駅で日本人参加者と合流、新幹線で長野へ。善光寺玄証院住職 福島貴和師に迎えられ、宿坊にチェックイン。
オリエンテーション、自己紹介、アイスブレイキング。

8月9日(木)

終日：ボランティア活動 飯綱高原へピクニック
大自然の中で、ケアを必要とする子どもたちやボランティアの方々とバーベキューやアスレチックなどで楽しむ。

夕方：初めての「回転寿司」へ。

8月7日(火)

午前：ダンス練習 南中ソーラン節、ダブケ、マイムマイム

ワークショップ 紛争のシェアリング、「平和のメッセージ」準備

午後：ワークショップ 翌日の老人ホーム訪問準備（イスラエル・パレスチナを説明するスライド資料、一緒に楽しむゲーム・歌・パフォーマンスなどの準備）

夜：フリータイム

8月10日(金)

午前：ワークショップ 各自の平和のメッセージ作成

午後：ダンス練習 近くの「城山公園」で。

ワークショップ グループ毎にポスター作り。プロジェクトの目的を絵で表現する。

8月11日(土)

午前：ワークショップ イベント「平和の架け橋交流会」の準備：会場設営、ダンスの練習、中東料理の準備など。

午後：「平和の架け橋交流会」開催：参加者約60名

- 1) 理事長挨拶
- 2) イスラエル・パレスチナ・日本の参加者紹介
- 3) 平和のメッセージ
- 4) 文化交流：3カ国伝統の歌とダンス。

8月8日(水)

早朝：善光寺早朝のお朝事（お勤め）に参加。

午前：曹洞宗の住職から禅の手ほどきを受ける。

ワークショップ プロジェクトの目的共通理解のため



ヤーレン、ソーラン、ソーラン、城山公園での練習に力が入る
Ya-ren, soran, soran…… Very hard practice of Soran-Bushi



ハートネット デイサービスセンターで楽しい交流のひとつ。お年寄りにも若者たちにも笑顔
Volunteer Work at the Day Service Center Heartnet. Both elderly persons and youngsters are so happy that they are all smiles.

地元のハンドベルグループ、ベルリンガーズ松代も参加してくださった。

5) 中東料理ビュッフェ: プロジェクト参加者がつくった中東料理を提供し喜んでいただいた。

6) 「みんなで踊ろう!」盆踊り

(助成金を頂いた三菱UFJ 国際財団から渡邊氏が視察に来てくださった。)

夜: ホームステイ イスラエル・パレスチナの参加者はホストファミリーのもとへ。日本人参加者は玄証院にとどまる。

8月12日(日)

終日: 日本人参加者は白馬と八方尾根へピクニック。

午後: イスラエル・パレスチナの参加者、ホストファミリーのもとから帰る。思い出を胸に。

夜: フリータイム

8月13日(月)

午前: ワークショップ 「行いの規律」振り返り。「平和の架け橋交流会」の振り返り、ホームステイの体験分かち合い。

午後: ワークショップ 「紛争」についてのディスカッション 善光寺玄証院の掃除・整頓と移動準備

夜: フリータイム



出発の朝、玄証院の玄関で。ここで8日間の実りある共同生活を体験した

Morning of the departure for Tokyo. A picture at the entrance of Gensho-in where the participants passed 8 days of a very fruitful communal life.

第二部 東京での活動 8月14日(火)～19日(日)

8月14日(火)

午前：長野から東京へ高速バスで移動
午後：新宿に到着。JICA にチェックイン、オリエンテーション後、フリータイム。東京観光へ。

8月15日(水)

午前：ワークショップ アイコンタクトゲーム《目は口ほどにものを言う》相手とのコミュニケーションをさらに深めるため。

サバイバルゲーム(合意形成のエクササイズ 命の危険にさらされた時、どう助け合って生き残るか。)

午後：ワークショップ 「文化交流」：書道「平和」の文字を習う。漢字やヘブライ文字の成り立ちなど。

ワークショップ 《長野での共同生活》での感情面からの振り返り。私たちはどんな時に喜怒哀楽を感じるか。争いの原因は何か？

夜：フリータイム

8月16日(木)

午前：ワークショップ

1) 長野での活動の振り返りと分かち合い、信頼ゲーム。

2) プロジェクト全体の振り返りと反省、良かった点、改善点なども含めて。

午後：ワークショップ トラストゲーム、紛争の要因分析と発表

夜：ガザからラミが到着。(イスラエルの治安当局から、エレッツ検問所を通る許可が出なかったため、ラファ検問所を通りエジプト経由で、グループより10日遅れて来日)

8月17日(金)

午前：ワークショップ トラストゲーム(相手を信じること)

ワークショップ ディスカッション

(1) 紛争解決の方法は?: 《1国家か 2国家共存

か?》

(2) イスラエル軍のガザ攻撃について

午後：ワークショップ 紛争解決の方法は?: 《自己中心か、他者の利益も考えるか?》

ダンス練習

2 Sides Activities (Good & Bad)

夕方：フリータイム

8月18日(土)

午前：ワークショップ シンポジウム用プレゼンテーション確認、平和のメッセージ作成。

ワークショップ 「絆」ゲーム、プロジェクトの集大成として、友情、感謝の気持ちをかたちにする。

午後：ワークショップ 各自のプロジェクト・リポート作成。先ず各自が、このプロジェクトの実りとして何を決意するかを考察。感想、決意文作成。

夕食後：ワークショップ 平和のメッセージのリハーサル

8月19日(日)

午前：ワークショップ プロジェクト全体の振り返り。平和のメッセージのリハーサル

午後：シンポジウム準備 会場設営など
シンポジウム:

- 1) 理事長挨拶
- 2) 自己紹介と平和のメッセージ
- 3) スライド資料によるプロジェクトの紹介(長野・東京・共同生活の3つのテーマで)
- 4) ダンス披露:ソーラン節、ダブケ
- 5) グループ ディスカッション
- 6) みんなで踊ろう:盆踊り、マイム・マイム

プロジェクト解散式

夕食:フェアウェルパーティー

(ゆかた姿で新宿へ)

8月20日(月)

午前：プロジェクト終了 解散

Daily Reports of the project

Part One : Activities in Nagano / Aug. 6 ~ 13

Sunday, Aug. 5

Evening : 7 participants from Israel and Palestine have arrived with Yacoub Ghazzawi, our staff, at Narita Airport from Tel Aviv.
Stayed at a hotel near Narita airport.

Monday, Aug. 6

AM : Participants from Israel and Palestine moved from Narita Airport to Omiya by bus. They joined up with participants from Japan at Omiya Station and went to Nagano by Shinkansen.

PM : Welcomed by Rev. Takakazu Fukushima, chief priest of Gensho-in and checked in at the pilgrims' lodging of the temple.
Orientation, Self-introduction, Ice-breaking.

Tuesday, Aug. 7

AM : Dance practice Nanchu Soran-Bushi, Dabke, Mayim-Mayim

Workshop Sharing of personal experiences of conflict.
Preparation for "the message of peace"

PM : Workshop Preparation for visiting of the nursing home next day.
(Preparation for games, songs and performances)

Evening : Free time

Wednesday, Aug. 8

Early morning : Attending the morning chanting of Zenko-ji.

AM : Learning Zen from a chief priest of the Soto sect.

Workshop Verification of the common understanding of the purpose of this project (by each group and the whole group).

PM : Volunteer works Visiting the nursing home "Day Service Center Nagaden Heart Net". Had an enjoyable and heartwarming interaction. Both the youth and the elderly were greatly pleased.
Dance practice Had a dance lesson at "Shiroyama-Park".

Evening : Free time

Thursday, Aug. 9

All day : Volunteer works Went to Iizuna Highland for a picnic. Enjoyed a barbecue and obstacle courses with children need some care and volunteer staff.

Early evening : Went to the sushi-go-round restaurant for the first time.

Friday, Aug. 10

AM : Workshop Each participant drew up his "message of peace".

PM : Dance practice Had a dance practice at "Shiroyama-Park".

Workshop Each group produced posters presenting their understanding of the purpose of this project through drawings.

Saturday, Aug. 11

AM : Workshop Preparation for the event "Peace Bridge" International Cultural Exchange :
Setting up the event venue, dance practice, cooking, etc.

PM : "Peace Bridge Cultural Exchange" :

60 participants

1) Messages from the president.

2) Introducing participants from Israel, Palestine and Japan.

3) The message of peace.

4) Cultural exchange: Performing traditional songs and dances. The local hand-bell group attended the event.

5) Offering the buffet of Middle East cuisine cooked by the participants and it was well-received.

6) The Bon festival dance "Let's dance together!".

(Mr. Watanabe from Mitsubishi UFJ Foundation provided a subsidy to us visited the event.)

Evening : Homestay Participants from Israel and Palestine stayed with their host families.
Japanese participants stayed at Gensho-in.

Sunday, Aug. 12

All day : Japanese participants went to Hakuba and

Happo-One for a picnic.

PM : Israeli and Palestinian participants came back to Gensho-in from host families with wonderful memories.

Evening : Free time

Monday, Aug. 13

AM : Workshop

- 1) Reflection on the "Rules of Conduct".
- 2) Reflection on the "Peace Bridge Cultural Exchange" in Nagano
- 3) Sharing their homestay experiences

PM : Workshop Discussion on the "conflicts".

Cleaning up Gensho-in and getting ready to travel.

Evening : Free time

Part Two : Activities in Tokyo / Aug. 14 ~ 19

Tuesday, Aug. 14

AM : Traveled from Nagano to Tokyo by express bus.

PM : Arrived in Shinjuku. Checked in at JICA. Free time after attending the orientation. Sightseeing in Tokyo.

Wednesday, Aug. 15

AM : Workshop Eye contact game: "The eyes say more than the mouth." To get to know better each other.

Survival game (Consensus-building exercise. When they encounter certain death, how they help each other out and survive.)

PM : Workshop

- 1) Reflection on the communal life in Nagano from the point of emotions (joy, anger, sorrow, anger or pleasure)
- 2) Discussion of the causes of conflicts

Evening : Free time

Rami arrived from Gaza 10 days behind.

Thursday, Aug. 16

AM : Workshop Trust-Game (Believing in the other person.)

Workshop

Discussion How to solve conflicts?(1) :

(One state solution or coexistence of the 2 states?)

About the attack of Gaza Strip by the Israeli army.

PM : Workshop How to solve conflicts?(2) :

(Being egoistic or being altruistic?)

Dance practice

Workshop 2 Sides Activities (Good & Bad)

Evening : Free time

Friday, Aug. 17

AM : Workshop Confirming the presentation for the symposium.

Drawing up the message of peace.

Workshop "Bond-Game" Turn a bond of friendship and gratefulness into something remarkable as a compilation of this project.

PM : Workshop Drawing up their own project reports. At the very beginning, each one examines what they want to determine as a compilation of this project.

Evening : Workshop Rehearse the message of peace.

Saturday, Aug. 18

AM : Workshop Taking an inventory of the whole project. Rehearse the message of peace.

PM : Preparation for the symposium Setting up the event venue

Symposium:

- 1) Messages from the president.
- 2) Self-introduction and the message of peace.
- 3) Introducing this project by using slide presentation materials.
(The theme of Nagano, Tokyo and Communal life.)
- 4) Performing the dance: Soran-Bushi and Dabke.
- 5) Group discussion
- 6) Let's dance together: The Bon festival dance and Mayim-Mayim.

Closing ceremony

Dinner: Farewell party (Get dressed in Yukata and went to Shinjuku.)

Sunday, Aug. 19

AM : See you again!!

5 収支決算 Balance Sheet

プロジェクト会計報告 (2018年4月～9月) Project Financial Report (April - September 2018)

収入の部 Revenues

単位:円 Unit: ¥

費目 Items	摘要 Descriptions	金額 Amount	
支援金等 Contributions, etc.	一般寄付金 Private donation	1,563,413	3,969,063
	助成金 公益財団法人三菱UFJ国際財団 Subsidies by MITSUBISHI UFJ FOUNDATION	700,000	
	イベント収入 (講演会、チャリティー・イベント) Charity event participation fees (Total)	411,000	
	参加費 学生、スタッフ、他 Project participation fees (students, staff)	1,294,650	
自己資金 Own funds			30,000
合計 Total			3,999,063

支出の部 Expenditures

単位:円 Unit: ¥

費目 Items		摘要 Descriptions	金額 Amount	
旅費 Travel expenses	国内旅費 Domestic travel expenses	交通費(列車、高速バス、レンタカー他)、滞在費(宿泊費・食費など) Transportation (Shinkansen & train fare, rent-a-car and other travel expenses), Accomodation (Lodging・Meals)	894,788	2,213,648
	海外旅費 Oversea travel expenses	航空券代 テルアビブ～成田 Roundtrip travel expenses Tel Aviv～Narita	1,318,860	
人件費 Personnel expenses		事務運営費、イスラエル・パレスチナ事前準備費 Administrative expenses, Preparation in Israel / Palestine	800,589	968,548
		謝礼 Reward	167,959	
会議費 Conference expenses		施設使用料 Rental fee of seminar room & hall	125,329	191,371
		交流イベント、フェアウェルパーティー Event fee, Farewell Party	66,042	
印刷・複写・製本費 Print / Copy / Bookbinding		パンフレット・しおり、コピー、報告書作成 Leaflets, brochures and booklets, Making report book	80,048	80,048
通信・運搬費 Communications / Delivery		通信費・宅急便代、報告書発送 Communications / delivery, Report shipment	32,767	32,767
消耗品費 Consumables		各種生活雑貨、Tシャツなど Groceries, T-shirts	159,907	159,907
雑費 Miscellaneous expenses		振込手数料、その他 Transfer fees、Others	2,774	2,774
イベント費 Event expenses		講演会、チャリティー・イベント Charity events and seminar expenses	350,000	350,000
合計 Total				3,999,063

6

参加者の声

Feedback from the Participants

青年参加者の声 / Voices of the Young Participants

シーラ・バハット Shira BAHAT

●イスラエル 22歳
●Israeli 22 years old

社会人
Employee

プロジェクトに参加する前から、「このように紛争が解決されるべきだ」、という理想はあったものの、具体的な解決法がよくわからなかった。また、紛争に関する意見はいろいろあったが、私が生きている社会が、そもそも解決を望んでいるのかもわからなかった。けれども、プロジェクトに参加し、異なる意見をもつ人たちと出会ったことで、イデオロギーではなく、「人」と接している限り希望はある、ということがわかった。お互いの意見に賛成はしなくても、自分とは異なる意見に触れることで、自省する機会を得た。私たちは、思考をオープンに保つことが、紛争に関する議論においていかに重要かということを学んだ。私は、自分の視点が柔軟であるように心がけており、その点では自己目標を達成できたが、それが可能だったのは、自分自身も、他の参加者も、異なる意見に耳を傾ける意識があったからだ。自分がかかなり頑固であるということに自覚していたので、自分の性格を少しは変えないと、紛争に関するディスカッションは難しいことがわかっていた。過敏なところ、人に希望をもてないところ、そして深刻な問題から逃げてしまうところ。そんな自分の弱さに突き当たるたびに、私は「他の参加者は大変な努力をしてこのプロジェクトに参加したのだ。ここで踏ん張るのは自分の責任だ」と思うようにした。そうすることで、私は以前よりは強く、優しくなれ、また理解力

を養えたと思う。このプロジェクトが私にくれた希望によって、人は変われるということ、そして物事は自分が思っているより可変的である、ということを感じるようになった。だから、イスラエルでは、より社会的活動に参加したいと思っている。このプロジェクトでの経験を日常生活の中で周りの人たちに伝えるだけでなく、それを私のキャリアや活動の中心に据えたい。「向こう側」に対しても自分を開いていきたい。

このプロジェクトは、日本人が第三者として参加した、という点でユニークだった。少し経ってから気づいたが、日本文化とこのプロジェクトの目的は関連している。日本文化は、外国人の目から見れば少し過剰なくらい、本来共感の特徴としている。日本人の、こうした心の持ちようは、言葉だけでなく、日常生活の小さな行為一つひとつに現れていて、イスラエル・パレスチナ社会は、日本人のこのような生き方から学べるものが多くあるのではないかと、思う。正直さや誠実さは、わたしたちの文化にはなかなか見られないものなので、このプロジェクトのような文化交流は、大変興味深いものだった。日本文化は、イスラエルとパレスチナという二つの文化の間で、多様で平



等な社会を築くためのヒントを提供してくれていると思った。だからこそ、日本人参加者の存在は、平和を模索するうえで大変重要だった。

アラブ人、パレスチナ人と会う経験も、私にとっては新鮮だった。お互いにどれだけ似ているか、また日本で築かれた関係性がいかに自然なものであるかに驚いた。それは、私がこれまで学校で「教えられて」きたこととは違う事実だった。プロジェクトの前にも、紛争がパレスチナ側の生活に及ぼしている影響について自分なりに学んだつもりではいたが、実際に彼らから話を聞いたことには、比較にならないくらいのインパクトがあった。私たちの生活の中にはびこる不正義をなくしていかなければならない、という気持ちはより強まった。平和への希望として、私は共存という道を選びたい。共存というアイデアをみんなに理解してもらうためには、プロジェクト参加者が警戒心を解いて、素直に向き合ったときに展開した景色を見せてあげることだと思う。このようにして平和の種は育つのだ。他者への恐怖、そして共存することで自分のアイデンティティを失う恐怖が、紛争の根底にはあるが、私は反対に、「世界に存在してほしい人間になる」という目標を掲げたい。そして、この哲学を自分の生き方に反映させることができれば、それを見た人が「このような生き方も可能なのだ」と思ってくれるはずだ。それがすべての始まりとなる。私は、アラブ人、パレスチナ人、そして他のグループに属す人々も、私自身がイスラエル側で育つことで受けてきた恩恵をぜひ受けてほしいと思う。共存と繁栄の多様な社会を築くこと。これがプロジェクトを経た私に示された道だと信じている。

Before coming to the project, I had many ideals of how the conflict should be solved, though I did not have a practical solution in mind. Also, even though I had many opinions about the conflict, I did not believe that my society wants a solution. However, by joining the project and meeting with the people of distinct opinions, I realized that there is always hope when we deal with humans, instead of "ideas." Even if we did not agree with each other, hearing other perspectives always urged us to reflect upon ourselves. We realized how crucial

mutual open-mindedness is for the discussions on the conflict. I wanted my perspective to be more flexible, and, in this sense, I have achieved my goal. I was able to do so only because I and the people who I have spoken with had the intention of listening to different points of view. I joined this project knowing that I was quite a stubborn person. Therefore, I continuously reminded myself that I had to change a few of my characteristics to deal with this kind of issue: sensitiveness, lack of hope in others, and the fear of confronting serious problems. Every time I faced such weaknesses in me, I told myself that people in this program made a great effort to be here, and it was my responsibility to do that too. This is what has eventually made me stronger, more empathetic, and more understanding and cooperative, even just a little bit. The hope that this program gave me has led me to believe that anyone can change and that things are more dynamic than they appear. That is why I plan to be more socially active in Israel: not only passing on the lessons from this project in my daily life and in conversations, but also integrating and prioritizing this purpose in my career or activism. I want to open myself to the other side.

This project was unique in a sense that it was including the Japanese as a third party. Only after a while I realized the connection between Japanese culture with the goal of the project: the Japanese culture is inherently empathetic, which appeared even too intensive from the Western perspective. Empathy took place not only in words, but in every little daily action. The Israeli-Palestinian society can learn a lot from the Japanese way of living. The honesty and authenticity are very new concepts to our society, and I think this cultural meeting brings about a very interesting result. This is a chance to revive a diverse, equitable society between the two cultures - the missing piece of the puzzle. That is why the Japanese are the perfect match to make a way for peace.

Meeting with the Arab and Palestinian side was also very new to me. I was surprised by how similar we were and how natural the connections were, despite what I had been "taught". I had tried to educate myself before the program about the consequences of the conflict for the Palestinian side, but hearing things from the people themselves had a great and deep effect on me. It further convinced me to change the injustice in our lives. As for my hope for peace, I stand by

the practical solution of a shared state. In order to convince people in that notion, I think we need to let people see the view we saw when we put our guards down. That is how the seeds of peace prosper. The fear towards others and towards losing your distinctiveness by sharing with others the way of living and territory are, in my opinion, at the core of the conflict (and this also applies to many other political conflicts). On the contrary, I

believe in "being what I want to see in the world." And if I practice this philosophy in my own life, maybe even one person will think such way of living is possible. And this is the start. I want Arabs, Palestinians and other groups in my country to enjoy the same privileges I had growing up in the Israeli side. Sharing a life together and creating a flourishing, pluralistic society. After this project, I have nothing left to do but to believe in that.

ナルキス・メヘラリエヴ Narkis MEHRALIYEV

●イスラエル 22歳
●Israeli 22 years old

社会人
Employee

このプログラムに参加できると知ったとき、イスラエル人とアラブ人が、日本という安全な場所に行き、周囲の目を気にすることなく、自分たちの意見や差異について話し合える機会を得られることに、とても感激した。

通常、私はイスラエル・パレスチナ紛争について周囲の人と話すことはない。とても感情的なトピックだからだ。ふだんはその話題を避けているが、ときに紛争について話すと、合理的な返答よりも、感情的な言葉ばかり返ってくる。

このプロジェクトは、紛争について、安全な環境で話し合う機会をくれた。すべての参加者がこの平和構築の目的を共有しており、私の考えや信条を受けとめてくれた。はじめから、参加者は紛争に対しそれぞれ違う意見を持っていたし、日常生活で紛争のことを話したときにあったような口論が起きたこともあった。けれども、2週間の共同生活を経て、私の考え方は変わった。というのも、ときに他の参加者と意見が食い違い、言い争いもしたけれど、ワークショップが終わってネガティブな気持ちが残ることはなかったからである。すべての参加者がお互いの違いを受け入れあい、友人関係を損ねないようにしていたからだ。

共に生活し、自分の痛みよりも人の痛みに気持ちを向けた経験は、心を開けばなんでもできるのだということを証明したと思う。私が最もこのプロジェクトで良かった、と思うのは、言い争いがあるたびに、その相手と個人的に向き合って、もし傷つけた

のなら謝りあったことだ。はじめ意見が食い違った人のほうが、最終的に仲良くなれたのは、嬉しい驚きだった。というのは、いつか感情が邪魔しても、本当に言いたいことや信じていることは結局同じである、ということに、お互い気づいたからだった。時間

をとってちゃんと相手の話を聞いたら、関係は劇的に変わる。このような相互理解は、プロジェクト参加者に限らず、すべての人たちの間で可能だと思う。

このプロジェクトに参加した経験は、意味のある会話をしたり、思いやりをもって人と接したりするためのツールをくれた。また、全く異なるバックグラウンドから来た人とも、親友のように仲良くなれることも知った。私は、平和は私たちの内側から生まれると信じている。イスラエル・パレスチナ紛争を解決するには、このプロジェクトでしたように、自分たちの中にある対立を解決する必要があるのだ。

この2週間で、本当の葛藤を目にした一方で、本当の変化も経験した。自省する時間をきちんと取れば、いろんなことが実現できると信じている。

私は平和が実現すること、そして人々が、私たちのように変化を恐れなくなることを願っている。



The moment I got the news that I had been accepted to this program, I was thrilled and excited to have the opportunity to travel to Japan with Israelis and Arabs and talk about our differences and opinions in a safe place where we did not need to be afraid to do so.

Usually, I do not talk about the Israeli-Palestinian conflict because it is such an emotional subject for a lot of people. Therefore, I sometimes avoid the conversation. When I do talk about the conflict with others, they give emotional response rather than taking rational approach to the conflict and the ways to end it.

Having the opportunity to participate in this project gave me a chance to talk about it, and I felt safe doing so. All the participants shared this goal, so it gave me an outlet for my thoughts and beliefs. From the very beginning, the group had different opinions and beliefs about the conflict and sometimes arguments occurred exactly like when I had talked about it in Israel. However, having this experience and staying with the participants for two weeks changed my way of thinking. Even though I sometimes disagreed and had arguments with others, no bad feelings remained after we finished the workshops. All participants respected each other for our differences and tried not to affect the relationships with each other.

This experience of living together and listening

to each other's pain, rather than focusing on our own, proved me that everything is possible if you give it some time and you open your heart. What I liked the most was that, after each argument over the conflict, we always sat down to talk to each other privately and apologized if we had hurt the other. I was amazed how I began to relate more with those I had originally disagreed with – in the end, we realized that we were saying and believing in the same thing although our emotions got in the way. When we took our time and listened to each other, the conversation changed dramatically. I truly believe that this mutual understanding can happen not just between the project participants, but also between all human beings.

This experience gave me the tools to conduct better discussions and act more considerately to others. It also helped me realize that people with completely different backgrounds and beliefs can relate to each other and feel as close as best friends. I believe that peace starts from within us. Resolving the Israeli-Palestinian conflict also depends on resolving the conflict within us, just like we did in this program.

I've seen real struggles in this past two weeks, and I've also seen real changes. I believe everything can be achieved if you give yourself the time and reflect.

I hope peace be achieved and people be willing to change just like we did.



イムリ・ゲフェン

●イスラエル 24歳
●Israeli 24 years old

プロジェクトに参加する前、私は自分を政治的には左翼だと定義していた。イスラエルとパレスチナという別々の二国を設立する、という解決方法や、イスラエルによる占領の早期終了を願っていたからだ。18歳で投票権を得てからは、選挙のあるごとに左翼的なキャン

ペーンに積極的に参加してきた。

このプロジェクトはそのような自分の意見の多くを

Imry GEFEN

社会人
Employee

変えたと思う。私はまだ左翼ではあるが、同時に、左翼であること、そして占領が終わるべきだと信じることで、すべてが解決するわけではないと学んだ。直面するには勇気がある難しい問題があることも学んだ。

私はこれまで、常に自分の政治的意見や行動を自問し、周囲に流されることのないように歩んできた。

それでも、私の情報源は、イスラエルメディアや周囲の人々に限られていた。これまで自分のことをよく知っていたつもりだったが、実は、表面をこすった程度のことしか知らなかったのだと気づいた。

このプロジェクトでアラブ系イスラエル人やパレスチナ人との対話は、私にとって大きな教訓となった。私がこれまで疑わず受け入れてきた情報は、イスラエルメディアやそれを信じる周囲の人々からのプロパガンダだったとわかった。

反対側の立場の意見を聞き、彼らの痛みを感じ、この紛争の本質やその中に生きる人々の辛さのほんの一部でも理解できたことで、果たされなければならない数多くの仕事がある、ということに気がついた。

私はまだ、2国家共存政策の可能性を信じている。それが完璧でもなく、最善の解決法でないことはわかっているけれど、中東全体の平和と共存を願う私にとっては、この政策は考える現実的な方策だと思ふのだ。今では、紛争がいかに日常生活のあらゆる側面を浸食しているか、また自分がいかに恵まれた環境に生きてきたかがわかる。この気づきが、声を上げ続ける勇気となり、戦い続ける力となる。たとえば、いま自国で起きていることに、歯がゆさや苛立ちを覚えることがあっても。

私が、イスラエルに戻ってまずしたいことは、アラビア語を学ぶことだ。これまでずっとやりたいとは思いつつ怠け心に負けてきたが、今後はちゃんと勉強したいと思う。また、もっと読書をし、政治的な活動にも積極的に関わっていききたい。紛争の反対側にいる人々ともっと会いたい。ヨルダン川西岸も訪ねたい。この訪問はいつ実現するかわからないけれど、知っているだけで何もしなかった過去に戻ることはできないのだ。そして、自分の目と頭こそが頼りだとわかったから、誰かを間に挟んで手に入れた情報ではなく、自分で見聞きしたことを信じていきたいと思う。これからも平和について語り続け、自分のアジェンダを推進し、このプロジェクトで聞いた話を広めていきたい。

このプロジェクトでは文化的相違、というものを理解する必要があった。ただ観光するだけでなく、長野での共同生活や松代でのホームステイを通して、日本の生活の文化や習慣に浸れたことは、かなり重要な変化をもたらしたと思う。はじめは、「自分は何も理解できないのではないか」「受け入れてもらえないのではないか」と不安に思っていたが、実際体験してみて、差異とはむしろ大事にされるべきものなのだ、と気がついた。そして、いろいろな違いはある



3カ国ミックスのグループで、朝食の準備。互いに知り合うひととき。
Preparation of breakfast, a happy moment to know one another better and better.

にしても、みんな同じ人間であり、「違う」ということは非難されるべきでない、ということにも気がついた。確かに、お互いを理解し、きちんとコミュニケーションを取りあうには努力が必要だが、それまで理解できないと思っていたこともいずれは理解できるようになるのだ。普段の環境から遠く離れて自分を見つめなおすことで、自分とも、また、自分のコミュニティともより深いつながりを感じることができるようになる。ホストファミリーからたくさんの愛を注がれて、確かに緊張はしていたけど、どんな文化を背景にしても、人間のことを信頼していいのだ、と思えた。私たち人間は皆、愛したいし、愛されたい。心はそれでいっぱいなのだ。私はこの愛への焦がれが、文化的な壁も超越する、数少ない普遍的な真実のうちの一つだと信じている。違いを乗り越えることは大変だが、最後には、自分自身と、自分が住む世界をよりクリアな目で見ることができるようになるだろう。

私の平和への希望は変わっていない。私は紛争地で生きていても、はっきりと平等という価値を信じている。それは、これからも一生変わらないことだと思う。時に現実には、障害物となったり、妥協を迫って来たりすることもあるだろう。けれども、平和は、私たちの予期せぬ形でやって来る。このまま紛争が続いていくわけではないと信じている。だから、私は平和について語ることをやめないし、紛争で対立しあう人たちの意見を代弁できるように努力していきたい。平和は、片一方の意見ばかり聞いていては実現しないからだ。

時には自分が受け入れがたい真実をも受け入れなければいけないこともある。自分を省み、疑うこと。

これが平和を形作るうえでの義務だ。日々社会は変化しており、謙虚さと共感する力をもった道徳的な社会となりうる可能性も秘めている。それを心に留めて、私たちは故郷に平和を持ち帰りたい。

Before the project I defined myself as politically left-wing. I believed in the solution of two different states, Israel and Palestine, as that the Israeli occupation must end. I participated in left-wing campaigns every election since I was eighteen and had the power to vote.

The project changed a lot of my opinions. I am still a left-wing, but I understood that being left-wing and believing that the occupation must end isn't the solution for everything, and there are harder truths to deal with. I always tried my best to doubt my actions and my political opinions, and to ask myself questions instead of just following the herd.

Despite that, I was still learning all the information from my Israeli surroundings and the Israeli media. As much as I thought that I knew about it, I now understand that I didn't even scratch the surface.

Being able to converse with Arab Israelis and Palestinians was a huge lesson for me. I realized that the things I had taken for granted were just propaganda and information I got from the media and the surroundings. Being able to hear the other side's opinions and listen to their pain and understand, even just partially, the nature of the conflict and the people getting hurt by it made me understand that much more work is to be done.

I still believe in the two-state solution. However, I also understand why it isn't the perfect solution, and not even a good one. It is the only thing I can hope for realistically, even though my fantasy is always the coexistence and peace throughout the Middle East. Now I understand better how the conflict leaks into every aspect of life, and I can see my privilege even more clearly. That gives me the power to continue fighting, learning, and lifting my voice, even though I can get very frustrated with what is happening in my country.

The first thing I want to do when I go back to Israel is start learning Arabic. For me it was something I had always wanted to do but I had been too lazy to do it. I want to read more and be even more politically involved. I want to meet more live people

from the other side. I want to go see the West Bank. I don't know if this will happen right away, but there is no way I can go back to just knowing that it exists. I understand now that I can only trust my eyes and mind. I want to see and hear everything by myself, without someone filtering the information for me. I want to keep talking about peace, keep promoting my agenda, and tell the stories I have heard in this project.

I had to understand what cultural difference is. Not simply touring and sightseeing in Japan but involving myself in the Japanese life and lifestyle (Communal life in Nagano, homestay in Matsushiro), made a huge difference. I had been so afraid this will make me feel uncomfortable, that I will not understand anything and feel like an outsider. The truth was that the differences that exist are something to be respected. I know now that, despite the differences, we are all human and no one can't be blamed for being different. It takes much more work to understand each other and communicate properly, but you learn how to understand what seems incomprehensible. You learn who you are so far away from your own society. It connects you to yourself and to everyone around you. Feeling so loved and welcomed by my host family, even though I was so nervous, just proved me that I could trust people, no matter what culture they came from. We all want to love and be loved, and that is what fills our heart. I believe this desire for love to be one of the few universal truths, which is unstained by cultural differences. It takes a lot of work to overcome these differences, but, in the end, it gives you a much clearer views of yourself and the world you live in.

My hope for peace has not change. I still believe in equality in the clearest sense. That is something that will never change. I understand that reality puts obstacles in your way, making you take hard decisions or compromise in the face of difficulties. I believe that peace will come in a completely different form from what I imagine, but I believe there is no way this war will go forever. I will never stop talking about peace and trying my best to represent the both sides in this conflict. Peace cannot be made if you take only one side in account. You must take into account the hard truths as well. Self-inspection and self-doubt are mandatory for making peace. We grow everyday as a society and I believe we have the capability to be a moral one, with humility and compassion. With those in our mind, we will bring the peace to our home.

オハド・ナヴォン Ohad NAVON

●イスラエル 24歳
●Israeli 24 years old

社会人
Employee

私はオハド・ナヴォン。8月4日から19日まで、日本での平和プロジェクトに参加した。このプロジェクトの主たる目的は、イスラエル人とパレスチナ人との共同生活を通して、お互いへの理解を深め、平和を少しでも近いものにする事だ。プロジェクトの間、私たちはともに暮らし、料理し、食べ、そして掃除をした。それだけでなく、私たちがどのようにイスラエルーパレスチナ紛争を理解しているか話し合ったり、個人的な経験を共有したりした。

プロジェクトに参加する前、私は紛争に関する自分の意見は譲ることができなかつたし、アラブ人もイスラエル人も、自分たちが置かれた境遇に関して同じように感じていると信じていた。けれども、プロジェクト参加者の多様性のおかげで、異なる人間は異なる意見を持つということ学んだ。参加者一人一人から学ぶことも多かった。

他の人たちの意見に耳を傾けることで、多くの重要な知識を得たと思う。そして、意見や考え方には多様性がある、という知性的な「武器」を得た今、私はこれを私が知るすべての人々、また今後、話す機会のあるすべての人々に語り続けていきたいと考えている。

イスラエルとパレスチナは近いけれど、日本は地理的にも文化的にも中東から離れている。もしかしたらこの距離が、日本を平和の架け橋とならしめるのかもしれない。仏教的な側面を含め、日本文化についてともに学んだ経験は、私たちにとって大変興味深かつただけでなく、強いきずなを育むきっかけにもなった。

イスラエルとパレスチナの間の紛争はあまりにも長引いている。今こそ状況を良くするべきだ！

紛争の双方の側が話したり、互いの意見を聞き入れたりすることを認めれば、恐怖の連鎖や軍事行動を止める可能が生まれる。私は、いずれ人々が争いに疲れ、紛争が終わりを迎えると信じている。そして私たちも、それぞれの生活の中で戦争の終わりに向かって進んでいかなければいけない。

My name is Ohad Navon, and I participated in a peace project in Japan from August 4th to 19th. The project's main target is to make Israelis and Palestinians live together, in order to understand each other and make peace a little bit closer. During the project, we lived in communal life. We cooked, ate and cleaned together. We also talked about the way we saw the Israeli-Palestinian conflict and shared stories of personal experiences.

Before the project, I was stubborn with my opinions about the conflict, thinking that all Arabs in Israel thought and felt in a similar way about their lives in Israel. But thanks to the diversity of the participants in the project, I learned that different people have different opinions about the conflict, and I learned a lot from each one.

Listening to other people's opinions gave me a lot of important knowledge I didn't have before. Now, with this "armor" of knowledge about various opinions, I am going to pass it to everyone I know or have the chance to talk about these subjects with.

Israel and Palestine are very close to each other, but Japan is very far from the Middle East, both geographically and culturally. Maybe because of such distance Japan can be a good bridge for peace. Learning together about the Japanese culture, including some Buddhist aspects, was extremely interesting and made us bond with each other.

The conflict between Israel and Palestine is too long, and it is time to make things better! This will happen only when more people from both sides accept talking with and hearing each other and stop the terror and military attacks.

I believe that people will get tired of fighting, and the conflict will eventually come to an end. Each one of us need to help it happen in our everyday life.





アシール・ファルハット Aseel FARHAT

●イスラエル国籍アラブ人 23歳
●Israeli Arab 23 years old

社会人
Employee

プロジェクトに参加する以前から、私はイスラエルとパレスチナの間で起きているさまざまなことについて、きちんと意見を持っていると思っていた。2国間の紛争はとても大きな問題で、普段、特に自分と異なる意見の持ち主とは、

紛争を話題にすることは避けていた。しかし、この平和の架け橋プロジェクトでは、日常では話すことのないいろいろな問題について話す機会があるだろうと期待していた。人はみんな違うし、育った場所やコミュニティーも違うのだから、多様なバックグラウンドの人々が集まるということは、多様な意見に触れることを意味していた。

このプロジェクトは、紛争に関するほかの人の意見を聞き、受け止めるという素晴らしい機会だった。相手の考え方や認識の仕方を理解しようとも努めた。異なる地域から来るイスラエル人とパレスチナ人、そして紛争に関わっていない者として違う視点を持っている日本人が一つのグループを作り、聖地で起きている紛争や、紛争一般について、教えあい、学びあうことができた。

これまでたくさん紛争について考えてはきたが、このプロジェクトでは考え方そのものが変わったと思う。多種多様な意見を耳にすることで、自分の意見は、知識の欠如や誤解に基づいて成り立っていることもあるのではないか、と考えるようになった。他の人についても同じことが言えて、真実を知る機会がなかったせいで起きる誤解や無知によって、意見がかなり影響されていることがある、と気が付いた。

この経験を経て、紛争について話し、自分の意見を聞いてもらうことは、紛争を解決し、平和を実現する第一歩だと考えるようになった。紛争について話すことは、怖がるべきことではなく、むしろ奨励されるべきことだとも思う。だから、私からは紛争の話題から逃げることなく、自分の声を上げていこうと思っている。

日本での経験は、自分たちの故郷での混沌からしばしの間離れ、協働する機会をくれた。共同生活を経て、多くのことを学んだ。それは、紛争に関する意見の不一致や違いにもかかわらず、また時には、強く自己主張したにもかかわらず、お互いの違いを受け入れて、ともに一日を過ごすことができるということだった。

私たちはともに住み、ともに働き、ともに料理し、ともに踊った。意見がぶつかったときも、一緒に暮らしている以上、一緒に問題を乗り越えなければいけなかった。

私は、いつか、イスラエルとパレスチナが日本から学ぶ日が来ると信じている。日本は今では平和だが、いつもこうではなかったのだから。いろいろなことをシェアし、学びあい、新しい知識を得たことで、私たちは紛争を違った目で見ることができると信じている。私たちが、周りの人たちにこのプロジェクトでの学びを伝え、違いがあっても「平和に楽しく暮らしたい」という共通の願いを持った同じ人間なのだ、ということ語れることを信じている。

私は、このプロジェクトが自分の人生に大きな影響を及ぼしたことを確信している。これからも、自分の国の平和のために少しでも貢献できる、このようなプロジェクトに参加していきたいと思っている。

Before the project, I had been pretty sure about my opinions on a lot of things that were going on between Israel and Palestine. The conflict between the two is a very big issue that I normally avoid talking about, especially with the people who do not think like me and have different opinions about what is going on. Coming to the "Building a Peace Bridge in Japan" project, I expected to have the opportunity to address many issues that I would not address in my everyday life. Being amongst many people from different backgrounds and different places meant having many different opinions, because every person was different, including the places and communities they had

grown up in.

I had a great opportunity to hear other people's opinions on the conflict and listen to what they had to say. I also tried to understand the way they thought and perceived the conflict from their point of view. Israelis and Palestinians from different regions, together with Japanese participants who may understand the conflict differently as "outsiders," made a group in which they could teach and learn about the conflict in the Holy Land and conflicts in general.

Even though I had already thought about the conflict for a very long time, this project made me think about it in different ways. Listening to opinions so different than mine made me realize that sometimes I had my opinion because I did not know or misunderstood some things. I realized that some of other people's opinions were also a result of misunderstandings or ignorance due to the lack of means of learning the truth.

After this experience, I know that talking about the conflict and letting people know my opinions is a small step toward achieving peace and resolving the conflict. Talking about the conflict is not something that I should be afraid of but something I should be encouraging. That is the

reason why I will never run away from the topic but try to raise my voice instead.

The experience we had in Japan gave us all the chance to get away from the chaos going on in our country and live and work together for some time. The communal life showed us that despite the differences and disagreements over the conflict back home, and even we were all very opinionated, we could still live together, accept these differences and disagreements, and go on with our day. We lived together, worked together, cooked together and danced together. And when we had our disagreements, we learned that we were all in this together so we just need to be together no matter what.

I hope that, one day, Israel and Palestine can learn from Japan, this peaceful country that had not always been so peaceful. After sharing with and learning so much from each other, and given all this new knowledge, I hope that we can look at our conflict in another way. I hope that we can be a small group of people who teach others around us what we have learned, that even though we are different, we are all people, and we all want the same thing: to live peacefully and happily together, overcoming the differences.

ラウィ・ビシャラ Rawi BISHARA

●イスラエル国籍アラブ人 18歳
●Israeli Arab 18 years old

社会人
Employee

プロジェクトに参加する前、自分はこの2週間に何を期待すればいいのかわからなかった。共同生活、ワークショップ、議論……。最年少のメンバーとして、プロジェクトに何が残せるのかもわからなかった。ただ実際、このプロジェクトを通してこれまでにないくらい成長し、成熟したと思う。自分がどれくらい無知だったかを知ったことで、今はむしろ参加前よりエネルギーに満ちていると感じる。

シェアリングの時間は、他の参加者との関係を発展させるうえで、大きな意味をもった。みんなの経験——楽しいこと、悲しいこと、怒りに満ちたこと、喜びに満ちたこと——を聞くことができたのは、大きな恵みだった。こうしたシェアリングの時間は、みんなから多くのことを学び、相互理解を深め、また自分のことについても理解をしてもらえた、という意

味で、私にとって最も意義深い活動だったと思う。

私たちの住む世界には、何十億もの人が生きている。宗教、人種、ジェンダー、文化の多様性からして、違いが生まれるのは当然のことだ。けれども同時に、人々は共に働き、愛し合い、共有し、違いを乗り越え、そして平和的に暮らせる存在でもある。

行き違いや対立は起きるものだし、このプロジェクトでもそれが無いわけではなかった。意見の表現の仕方や、愛する者のために戦い、守る方法はいくつもある。だが、悲しいことに、時折、人は自分を見失い、宗教、イデオロギー、そして個人的な価値の



せいで、相手を自分より下に見たり、傷つけたりしてしまう。それが紛争への入り口となる。

でも私は、人間とはそもそも平和的に他者と出会い、付き合える存在だと信じている。だからこそ、プロジェクト中に、解決できないほどの問題や大きな対立は起きなかったし、参加者みんなで共に、平和的に過ごすことができた。

私の平和への希望は、外在的であるよりむしろ、内在的なものだ。つまり、平和という概念は、少なからず個人のイデオロギーや信条によって歪曲されているから、平和を実現するには、まず個人が自分の内なる偏見を乗り越えなければいけないのだと考えている。

他者と、そして何より自分を受け入れ、心穏やかに暮らすには、相手のことをもきちんと認め、理解しようと努力せねばならない。そのような理解と承認は、相互的で、かつ多少の自己犠牲を伴うものでなくてはならない。そうしてはじめて人間は、他者との接点を見つけ、差異を乗り越え、多様性を認め合えるのだ。

だから、双方にとっての善を選び、愛し、許し、認めあい、共感し合おう。こういう方法でのみ、紛争を解決していこう。なぜなら、愛は愛しか生まず、憎しみは憎しみしか生まないのだから。

In prior to the project, I did not know what to expect coming to Japan. The communal life, workshops, talking and arguing... I was quite



書道に挑戦：結構うまい！
Challenge to Japanese Calligraphy: pretty good!

unsure about what I could give to the project, being the youngest participant in the group. However, I have grown and matured more than ever in the project. Now, I strive because I know how much I do not know.

Sharing was a big part in developing my relationship with everyone. I felt so blessed to be able to listen to everyone's experiences and stories: happy, sad, angry or joyful.

These workshops were the best activities for me, regarding how much I could learn from everyone, deepen my understanding towards others, and help the others to develop in my turn by sharing my message for peace.

We live in a world where billions of people exist together. The diversity of religion, race, gender, and culture means that we are bound to be different from one another. However, I believe that humans are born to work, love, share, reconcile and live peacefully on the terms that meet everyone's basic needs.

Disagreements and conflicts are ought to happen, and they did happen in our project as well. There are various ways to express, defend and fight for what we love. Sadly however, sometimes people go overboard and regard others less than themselves just because of their religion, ideologies, and life choices. That is where they fall.

At the end of the day, however, I believe that we as humans are inherently peaceful when meeting new people. For that reason, there was no unsolvable problem or major conflict during the project, and the participants came to coexist after all.

My hopes for peace are internal rather than external. In other words, to achieve peace, one must first end the war within themselves, because the idea of peace is often tainted by personal ideologies and beliefs.

In order to live peacefully with others and most importantly with ourselves, we have to acknowledge the other side and try to understand it. Such an understanding and acceptance MUST be mutual and accompanied by a certain amount of sacrifice. Only then can we meet at the middle ground, bridge the differences, and accept the changes in others.

So choose the common good, love, forgive, acknowledge, and be considerate. Solve the conflict with these weapons because love gives birth to love and hate gives birth to hate.

ラミ・アルジェルダ Rami ALJELDA

●パレスチナ人 26歳
●Palestinian 26 years old

社会人 (NGO職員)
Employee (NGO Officer)

プロジェクトに参加する前は、アクティビティやコンテンツが少ないのでは、と思っていた。けれども、私は、自分が参加できた最後の3日間を、協調、協働、そして互いに心を開く、ということができた点で、とても楽しめた。

私はそれまで、イスラエル市民と、イスラエル—パレスチナ間の紛争について話したことがなかった。平和や協働に関する自分の考えを公の場で話したこともなかった。

プロジェクトの前半、特に長野での共同生活に参加できなかったことは、とても残念だった。けれども、他の参加者からたくさん話を聞くことができた。私が他の参加者と知り合えたのは、プロジェクトが終わる3日前だったけれど、その3日間で紛争の両者の生活について、そして紛争の解決法についていろいろ議論することができた。もしもっと時間があったなら、より多くの話ができただろうと思う。

私は、紛争のさまざまな形や、それがエスカレートする前に解決する最善の方法について学ぶことができた。また、特にイスラエル人参加者に対して、ガザにおける紛争についての自分の意見を述べることもできた。

参加者それぞれの紛争経験や視点が、自分が想像していたものとは大きく異なっていたことに驚いた。お互いの気持ちや痛みが、このグループの多様性を物語っていた。この多様性こそ、私が最もうれしく思ったことだ。私たちは、それぞれ違う側面や意見を持っていたけれど、その違いを尊重しあった。またその違いが、私たちの友人関係に影を落とすこともなかった。

プロジェクト終了後、私は自分の経験や、イスラエル人の、ガザ、パレスチナ、平和に対する考えを地元の人々に伝えたい。私たちが平和の架け橋となれるように導いてくれ、日本文化を体験させてくれた運営者の方々に感謝したい。

Before the project, I had expected to have fewer activities and contents in the project because of my very late arrival in Japan. However, I enjoyed the last two days in terms of harmony, collaboration and opening up to each other.

I had never talked with an Israeli citizen about the conflict between us. I had never publicly voiced my ideas of peace and collaboration in front of people.

I am sad that I missed the first half of the project, especially the experience in Nagano. However, I heard from many of the participants about it. I only got to know the participants two days before the project ended. In those two days we talked a lot about life on each side, the conflict and some ideas of solutions. If I had more time, we would have talked more about the conflict.

I learned about the different types of conflict and the best methods to handle them as soon as possible before they escalate. I enjoyed delivering my opinions about the conflict in Gaza, especially to the Israeli participants.

When I heard each participant's story and perspective about the conflict, I found all of them very different from what I had expected. Listening to each other's feelings and pain revealed the diversity of the group. This is what I enjoyed the most. We had different aspects and opinions, but we respected such differences and we did not let them affect our relationships as participants and friends.

My plan after the project is to deliver my experience to some people I know in Gaza and let them know how Israelis think about Gaza and Palestine and their perspectives on peace.

I would like to thank the organization for this chance to see Japanese culture that would guide us towards peace.





ナディーヌ・シャヒーン Nadine SHAHINE

●パレスチナ 24歳 社会人(音楽教師)
●Palestinian 24 years old Employee (Music Teacher)

この平和プロジェクトは、自分が思い描いていたものとは大きく違うものだった。紛争について議論するという事は聞いていたが、これほどまでに深く話し合うとは思っていなかった。紛争に関する話し合いは、時に感情的な場面を伴いつつも、毎回参加者同士で和解をして、前進していくことができた。

今から振り返れば、プロジェクトに参加したことで、人間というものに対する理解を深め、他者に対しより寛容になることができたと思う。普段はあまりにも多忙な日常生活を送っているので、ロボットのように思考が停止することもあったからだ。新しい出会いで、コミュニケーションがうまく取れないこともあったが、決して相手に関心がなかったわけではない。彼らをもっとよく知りたいという熱意はあったが、それまでの忙しい毎日のせいで少し疲れが溜まっていたのかもしれない。だから、自由時間やディスカッションの間、少し不機嫌に見えたこともあったろうが、他意があったわけではない。ちょっと休みが欲しかったのだ！けれども、参加者一人ひとりと出会えたことは、本当に幸運だった。誰もが、何かしらを教えてくれたし、このプロジェクトは善き目的を持った美しい機会だったと思う。

このプロジェクトは、忍耐、相互理解、そして自分の意見をはっきり言うことの重要性を思い出させてくれた。プロジェクト中、紛争についてみんなで考える機会は多かったが、そのたびに、日本人参加者が発する感情には驚かされた。というのも日本人は、イスラエル・パレスチナ人参加者が、もう聞き慣れて特に何の感情も覚えない話にも、一つひとつ反応していたからだ。

文化交流は素晴らしかった。イスラエルと日本のダンスをするのは初めてだったし、日本人や日本語についても深く学ぶことができた。自分の国ではだんだん見られなくなっているような、日本の子供たちの純粋さと規律正しさには感心した。

今私たちがやっていること——人々の心に平和の種を植えること——は、ぜひ将来的にも続けていきたいと思っている。このようにして、平和は大きく育っていくのだ。

音楽の教師として、私は子供たちに多様な音楽を教えている。オリエンタルやクラシックだけでなく、アフリカの音楽、中国の音楽、南アフリカの音楽、フランス語、ドイツ語、ズールー語、そして英語の歌も。音楽だけでなく、その背後にあるストーリーも伝えるのは、子供たちに世界には多種多様な人々、文化、言語、音楽スタイル、そしてダンスがあることを教えるためだ。

世界中の音楽を教えることで、子供たちは多様性という概念に親しみ、異なるバックグラウンドから来る人々とも臆することなく交流できるようになると思う。参加者間で文化交流をする——これこそ、私たちがこのプロジェクトで行ったことだ。

最後に、このプロジェクトの運営者、そしてこれを発展させるために関わったすべての人に感謝したい。プロジェクト参加者は、小さなグループかもしれないが、日本での経験を各自、自分が生きる場所に持ち帰れるのはとても有意義だと思う。

紛争地・現場の人々も、私たちのように考えることができれば、協働と寛容さをもって共に平和の構築者として育つことも可能だと思う。

This Peace Project turned out to be very different from my expectation. I knew that we would talk about the conflict, but I did not know that we would as deeply as we actually did. The discussions were sometimes emotional, but we were able to move on after each discussion.

I think this project helped me to better understand human beings and to be more patient with others. Because of excessive work in my daily life, I had become slow like a robot. Sometimes it was hard for me to communicate with new people, but that did not mean I was disinterested. I had the passion and joy of getting to know them, but I was perhaps a little tired from my hectic life back home, and I did not have the time to relax

before taking responsibilities again. Therefore, if I appeared somehow unhappy during the free time and discussions, I did not mean it. I needed a vacation! However, it was a great pleasure to know each one of you. Everyone taught me something, and the project was a beautiful opportunity that served the good.

This project reminded me to be patient, to understand others, and to have the courage to speak loudly and clearly. Most of the time, we were thinking about the conflict. And sometimes when we discussed our feelings toward the conflict, I was surprised by the different feelings expressed by the Japanese participants. The Japanese participants became emotional and sad by hearing the stories of the conflict which Israelis and Palestinians no longer felt anything because of being too used to them.

The cultural exchange was amazing. It was my first time to dance Israeli and Japanese dances. I learned more about Japanese people and their language. I loved the innocence and discipline of the children, because in my country such things are being lost day by day.

In the future, I think I will continue what we are doing – planting seeds of peace in many people’s minds so they would grow more and more. This is how peace starts building itself.

As a music teacher, I teach children different kinds of music: not only Oriental and Classical, but also African, Chinese, South African, French, German, Zulu and English. I also tell the story behind each song, so the children will learn that there are various people, cultures, languages, musical styles and dances in the world. Teaching music from around the world familiarizes children with diversity and helps them feel comfortable interacting with people from distinct backgrounds. And this was what we did in the Project: exchanging cultures between the participants.

Finally, I would like to thank the organizers of this Project and every person who helped developing it. The participants were a small group of people, but I think it was beneficial that we participated in it and took the experience back to our people. If the people back home can start thinking like us, we can grow together in collaboration and acceptance.

梶原裕史 Hiroshi KAJIWARA

●日本 23歳
●Japanese 23 years old

大学生
University Student

私はこのプロジェクトへの参加は2回目となる。そのため、ある程度プロジェクトの進行は知っており、またその道が平坦ではなく、時に困難に直面することも理解していた。

そこで私は、参加前から次の言葉を念頭に置いていた。“たとえ、死の陰の谷を歩くことがあっても、私は禍を恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。(詩篇 23:4)”

私はクリスチャンではないが、今回はそのむちと杖の助けを実感した。

今回のプロジェクトでは、人の可能性を実感したいと思っていた。そのなかで自分自身の成長も見込んでいた。そしてそれは、おおそ達成された。

当初の予想どおり、人々のエゴは次第にあらわになった。しかしその一方で協力し合う心も感じ取れ

たことは、人の可能性と連帯を象徴するものだったと思う。人間には確かに善の種があり、困難な境遇や環境の中でも、人としての素晴らしい道を歩むことができる実感した。

プロジェクト中、参加者のさまざまな心の機微に触れた。

同じ日本人同士であっても複雑な感情の揺れ動きがあったことも確かだ。この中で、いかにその心に寄り添えるか考えて実行したことは、私の中の善の成長になったと思う。時に受け入れるのが容易ではないこともあったが、前回の体験を踏まえてうまく対応できたと振り返る。

このプロジェクトの後、何ができるかを考えると、私は思案したまま立ち止まってしまう。私はこれから



すぐにイスラエルやパレスチナにボランティアや協力に行くこともないし、またそういった組織にも属していないからだ。何とか協力したい、という思いはあるがこの先、日本社会の一員となっていくことを考えると実現も難しいだろう。

それでもたとえば中東から来る人たち(もちろんほかの地域の人も含めて)を温かく迎えて相互理解の促進を図ることはできる。バザーなど何か日本でお手伝いできることもあるかもしれない。

今は何も力にはなれないし、小さいことですら企画し実行するのも容易ではないが、いつか何か大きな変化をもたらせるようなことができれば行いたいし、その機会を待つ段階でもある。

このプロジェクトの体験を経て、私は平和とは友人や家族などの間に芽生える「It's a small world.」(小さな世界)であると感じた。今回も小さいものではあるが、イスラエル・パレスチナ・日本の人々が、夢のような一つの平和な世界を作り上げることができた。

前回(2016年)もそうだったが、今年の参加者との出会いにも特別な運命を感じる。彼らとだったから、この小さな平和が達成できたと思う。

全ての参加者やスタッフとの絆を結べたことに感謝する。

希望あるところ、試練あり。

It's my second time to join this project. So, I could know how to proceed it, and understood it's a hard way to achieve. Also, there is a trial we'll confront occasionally.

Therefore, I prepared the sentence in my mind. "Even though I walk through the darkest valley, I



JICAでのワークショップ
A scene of workshop in JICA

fear no evil; for you are with me; your rod and your staff--- they comfort me."

I am not Christian, but I felt those words supported by rod and staff in this time.

The thing that I assumed in this project was to make sure of the possibilities of people. I also anticipated my own growth in that time. And it was roughly, but surely achieved.

As I expected in the beginning, the ego of people gradually appeared, but I felt the cooperative hearts on the other hand. I think that the point I felt. It's symbolic moment of the possibilities and solidarity of people. I believe that humans surely have a good heart each, when as suffering hardships, we can walk a good way of humans. and we say did.

During the project, I touched various nuances of participants. Even among the same Japanese, there was a complex emotional existence. I thought about how to think with care and keep it in my mind, and it leads to growth of my good heart.

Sometimes it was not easy to accept, but I think I could know and understand well with the previous experience.

After this project, What I can do? I thought. Then my thinking stucked. I couldn't I'll be volunteering or cooperating with Israeli Palestinians soon, nor I belong to such organizations. Actually, it will be difficult if I became businessman in Japan's society in the nearly future, in spite of I desire to cooperate somehow.

Nevertheless, I can do warmly welcome whom people coming from the Middle East (as well as people from other areas) and promote mutual understanding. Also there may be something I can do in Japan, such as supporting bazaars of Middle East.

Now I can do only a little thing, but I would like to do much more bigger things and through it, making a big change if I can, someday.

Through the experience of this project, I think peace; it's a small world, between friends or family or us. In this time, it's a small but we (Japanese, Israeli and Palestinian) surely made a peace world like a dream or many people who desire.

The same as my previous time, I felt a "special destiny" for the messengers who gathered for the peace. Because this is with them (peace messengers), this peace was achieved.

With the Kizuna, the bond and the solidarity, of all participants and staff.

"Where there is a hope, there is a trial"

金森 早紀 Saki KANAMORI

●日本 22歳
●Japanese 22 years old

大学生
University Student



今回のプロジェクトを通して「第三者」とは何か、をととても考えさせられた。第三者だからできることは何か、当事者にしかわからないこと、特に感情の面で今回は深く考えさせられる部分が多くあった。私を含め、他の日本人参加者も目の前で人が殺される場面を目撃したことはない。しかし、イスラエル・パレスチナ参加者が声を揃えて言っていたのは「慣れてしまっているから泣くこともなければ、いちいち気にすることもない」という言葉だった。ガザからの参加者もとても明るい性格だったが、彼の内に秘めている感情は、やはり一対一にならないと聞けないものだった。大勢の場で話すことができないような内容も、少人数だと話してくれてディスカッションをすることができたことはとてもいい経験だったと思う。

しかし、今回のプロジェクトでは日本人がよく責められていたな、とも感じた。日本人の時間厳守の態度や、あれこれ要求をしないことに対しても、「日本人はもっとわがままになっていい、自分の感情を表現すればいいじゃない!」と。しかし日本人側も、もっと彼らに「わがままばかり言わないで」と言えばよかったのかな、と思った。

将来の夢に関しては、難民支援の仕事をしたという気持ちもより一層強くなった。私はこれからパレスチナで2年間働くことになっているが、それも将来のためによりいい経験になるよう努力していきたいと思う。日本人の方には、メディアが取り上げる断片的な情報ではなく、「百聞は一見にしかず」ということわざがあるように、自分の目で見たこと聞いたことを信じてほしいと思った。パレスチナで働く、と言うと100人中100人に「危ないでしょ。どうしてその場所を選んだの?」と聞かれる。イスラエルも同じだ。危ない場所も確かにある。しかし、日本と同じように人々が普通に暮らし生活している。きれいな街並みがあることも知ってほしい。最近のニュースを見ていて思うことは、扱う問題は違うけれど「日本も人を人として扱う必要がある」ということを感じる。

今回このプロジェクトに参加してよかったのは、新しい繋がりができたこと、ガザの人の生の声を聞けたことだ。これから私を待っているパレスチナでの

仕事に少し自信が持てた気がする。

Before I jumped into this project, I thought Japanese should be examples of others' and make a good atmosphere during project as a third party.

Moreover, I could have a good opportunity to listen real voices of participants, so I was excited and also nervous about this. And of course, meeting new people was always pleasure and exciting things.

However, most of the time, I was not punctual as others mentioned. And also during discussion, Japanese are mostly quiet and keep our feelings inside by ourselves including me. We shared what we felt and thought after discussions. I understood that having discussion in English is difficult for non-native speaker, but always asked myself, "Is there anything I can do for them to participate more?" so that they could have more deeply conversations and understand more. But having deeply conversations with each member was really good and I could ask them what I could not during the discussions.

Though, the time was not enough to understand each other and respect each other, I still have many questions what I want to discuss. Therefore, I think I could've achieved 45% of what I expected before this project.

During this project I realized one thing about myself. I found that I did not like moving in the group, but I loved to be free and do did whatever I wanted. But I felt being be in a group and caring others was not so hard for me during the project, a little bit hard, but not as much as before. I think this is because I grew up.

The best experience what I could've done is hearing real voice from people who actually living there and it gave us an opportunity to understand what is going on there in various perspectives. It was our great profit.

Moreover, Rami's stories were beyond the word. I felt a lot like powerless, sadness etc. from his stories.

Through their stories, I thought I wanted to help people who are suffering and whom UN cannot

do anything for in the future I really want to be the person who can help them.

My dream is working for refugee since I was a high school student, and I will not change it no matter how hard it is. This experience pushed me more to make it.

I want to tell Japanese that this actual experience is really good to understand each other. I could feel the atmosphere even though I am not in Palestine or

Israel. Sometimes it is hard for people to understand each other, but I believe talking and caring others means "becoming friends". This means what is going on out there is not the problem only for them, also for us.

Last thing, I want to say seeing is the believing. Go beyond the stereotype.



山田 百華 Momoka YAMADA

●日本 21 歳 大学生
●Japanese 21 years old University Student

私は、今回のプロジェクトにおいて、期待し目標とすることがありました。

それは、イスラエル、パレスチナの若者と友達になること、プロジェクトメンバー全員が、またこのメンバーで集まりたいと思うような2週間にすること、そして、紛争地で暮ら

している人々の生の声を聞き、理解し、正しい知識を身につけ、自分の見聞を広げることでした。

私はこの2週間で、自分の英語力不足ゆえに、イスラエル、パレスチナの若者と個人的に深い会話はあまりできませんでした。しかし、自分から心を開き、相手を気遣ったり、話しやすい雰囲気を保ったりすることによって、メンバー全員と友達になることができ、良い関係が築けたと思っています。ワークショップでのシェアリングやディスカッションにより、彼らの経験や意見、思いを知ることもできました。

また、私は、今回のプロジェクトに参加したことによって、自分の英語力不足を改めて痛感したと同時に、英語力を持つことの大切さ、重要さを実感しました。また、パレスチナ問題に関する知識も十分とは言えないため、国外、国内問わず、もっと政治や社会の動きなどの時事問題、これまでの歴史と現状に目を向けることが必要だと思いました。今回のプロジェクト参加が、語学や政治、宗教などをもっと深く学びたいという意欲に繋がりました。また、精神面においても鍛えられたと思います。

この2週間でのさまざまな経験を通して、私は将来、国際協力に少しでも繋がる職業に携わりたいという思いがよりいっそう強くなりました。

特に長野での共同生活では、自分が思っていた以上に、人はみんな違う考え方やアイデンティティを持っていることを実感しました。その多様性を受け入れることは、決して簡単なことではありませんが、それがとても大切だということも改めて学び、貴重な経験ができたと思っています。

最後に、私の夢のひとつは、世界中の国が差別や紛争のない平和な国になることです。世界中の全ての人に、自分の身に危険を感じず、理不尽な差別で傷つくことのない生活を送ってもらいたいと思います。人はみんな何かかもが違いますが、その「違い」を受け入れることが平和への第一歩だと思います。互いに違いがあっても、それを理解しようとする努力、相手の立場に立って、相手を思いやる心が大切だと思いますし、私もそのことを常に心に留めておきたいと深く思いました。

My aim for this project "Peace Bridge Project" was becoming friends with people from Israel and Palestine, and all members think like I want to gather again with everyone after finishing the project. It was also my aim for this project to listening and understanding their experiences and real words and developing into a well-educated person. In this two week, I couldn't have deep

conversations individually because of my lack of English skills. But I could become friends and make good relationships with them by opening my mind from myself, caring of them, making and keeping good atmosphere to talk and so on. Also, I could know their various experiences, opinions and emotions by the sharing and discussion at the workshops.

By having participated this project, I felt keenly that my English level is too low, and the importance of having English skills at the same time. And I cannot say my knowledge about Israel and Palestine is enough, so I believe that I need to learn more about politics, history, and social problems regardless of international problems or domestic problems. This project encouraged me further efforts to study more about language, politics, religion etc. In addition, that also made my mental stronger.

Thorough a lot of experiences in this two weeks,

I think I want to get a job, which is even a little connected to international cooperation, in my future than before.

Especially, I really felt each person has different their own way of thinking and identity during the communal life in Nagano. It was not easy to understand that, but I learned that was important thing. So, I believe I gained such valuable experiences.

At the end, one of my dreams is all countries in the world get the peace, no discriminations and no conflicts. I hope all of people to live without feeling the danger of life and being hurt by the unreasonable discrimination. All people have differences, but I think that is the important first step towards "peace." Even everyone has differences, it is important to make an effort to understand that and care other persons. I also want to keep that in my mind.

深田 莉映 Rie FUKADA

●日本 20歳
●Japanese 20 years old

大学生
University Student

このプロジェクトと一緒に参加できた、イスラエル・パレスチナからのメンバーは、私には初めての中東の人々であった。

また、この分野に関してさまざまなことを共有しあい、教えてくれる日本人との出会いも、初めてだった。実際、国籍や宗教、そして言葉の壁を越えた関係を築けたことは最も大きな実りだったと思う。

現地の友達ができただけで、これまで、あくまで興味や関心の一項目でしかなかったイスラエル・パレスチナ問題に、より関わりたいと思う気持ちも強くなったし、何よりもその地域が、縁遠い外国ではなく友達のいる所になったことで、より身近に感じることができるようになった。ここでの繋がりは一生もので、ずっと絶やさずに大切にしていきたい。

メディアの報道ではなく、リアルな声、考え、状況を現地の人たちの口から聞いたことはとても貴重であり大きな意味があることだった。彼らの言葉は、時にはあまりに淡々としており、時には感情的でもあったが、どちらも重みのあるものだった。

イスラエル・パレスチナ問題についてのディスカッ

ション中や、想像したこともない経験を聞いたとき、やるせなさや無力感を感じることも多くて、言葉では表せない感情が湧き上がってくることもあった。

普段は経験しないそれらの感情を忘れずに、これからに繋がりたいと思う。日本人同士の衝突があった時、落ち着いた後のそれぞれの感情のシェアリングで、誤解などがなぜ生じたのかがわかり、これが紛争解決の一番理想的な状況だと思った。トピックは些細なことではあったが、衝突し、話し合い、お互いの気持ちを理解できたということを経験できたことはとても意味のあるものだった。

イスラエル・パレスチナのメンバーのシェアリングやディスカッションを通して、一般的にメディアから流れてくる情報が、いかに限定的で断片的で、時に意図的であるかということを再認識させられた。報



道されない事実、マイクは向けられない現地の人々の声、そしてバイアスのかかかっていない本当の情報を発信したいと考えた。プロジェクト終了後はそういった現地の声やメディアに取り上げられない事実を中心に、今回一緒にこのプロジェクトに参加する機会を持つことができた石塚花音さんと、インターネットを使った情報サイトやブログ等で発信の場を作りたいと考えている。

フリータイムに限らず、日本人である私が意識もしなかったことに驚くイスラエル・パレスチナメンバーの様子は、とても新鮮だった。日本人はもっと感情や考えをダイレクトに相手に言うべきだ、という声が何度か彼らから上がっていた。

日本人同士でもよくある誤解の原因の一つだが、感情などを外に出してもよいという考えがそもそもなく、むしろ何を外に出せば良いのかもわからないことがあった。日本の社会で育ってきた中で染みついてしまっている考え方だと思う。些細なことであっても、文化や習慣の違い、それぞれの「普通」とは何かを考えるきっかけとなった。時に衝突が生じることがあったものの、お互いが「普通」だと思い込んでいることが、実は特有のものであることを実感した。全員のバックグラウンドがばらばらだからこそ、その違いをシェアすることはとても興味深いものだった。

現地の紛争は、日本にいと、どこか遠い所、行ったこともない知らない地で起こっていることだと、目をそらし、考えないようにして過ごすことも簡単だ。だからこそ、思考停止に陥る前に、行動する勇気をもつことも忘れないでいたいと思う。切り取られた情報が溢れる現代社会の中で、誤解と無知から生まれる偏見があること、そして数字では決してはかれない、そこにいるそれぞれ一人ひとりのバックグラウンドがあるということを考えなければならぬと強く再認識させられた。「平和」とか「正義」とか、口では簡単に言える一言だが、誰のための、どんな平和であり正義であるのかを常に自分にも周囲の人々にも問いかけたい。

スリランカ政府が第二次世界大戦後に日本を許してくれた時の言葉、「憎しみは憎しみではなく、愛によってのみ止む」という言葉を忘れずにいたい。

人が作る世界は、結局は人と人との関わり方、繋がり方により変わるもので、ポジティブな輪を自分の近くから広げていける人になりたい。

All Israeli and Palestinian members I could join this project together were my first friends from Middle-east, and also, I'm so glad to encounter the Japanese members who shared various things with me and taught me about this field which I had not learned much so far. I believe that one of the most fruitful parts of this project was that I could make relationships with each one of participants beyond nationalities, religions, and even language barriers. Before I joined this project, Israeli-Palestinian issues were simply just my interest, but thanks to having such amazing friends from the Middle-east, it improved my motivation to learn this field and boosts me up to be more familiar with them. Moreover, for me, the Middle-east is not just far area from Japan anymore but the place my friends are living in! I will treasure this relationship with them for the rest of my life.

Having the opportunity to listen to the real feelings or members' own experiences from both Israeli's and Palestinian's sides was meaningful. Sometimes they talked emotionally, and sometimes they did in a bland tone but each word they said always carried considerable weight. I have never been in a conflict situation so that I needed to imagine the scenes, but mostly it was never enough. During the Israeli-Palestinian conflict discussion or sharing time, I could not help feeling powerless and asking myself what I can do for it in real, and sometimes the indescribable emotion came up from inside of me. Even though I do not know how to handle it, I want to keep that in my mind which I cannot experience in daily life.

As it turned out, the quarrel among Japanese participants was more meant to me than I expected at that moment because I could experience the process of solving the conflict by having conversations. It had been a while since I got involved in such a kind of trouble. I could not stand the uncomfortable atmosphere right after the argument, but Yuji-san stepped forward and led us to break the invisible wall which we unconsciously built up by misunderstanding. Then, we could share what we actually wanted to say without emotion. In some parts, their meanings were totally different from my interpretation, and vice versa. Through this small conflict, even though the topic was tiny, this process was the best ideal way for the conflict resolution. Everyone knows it is much more complicated and difficult in the real situation though.

The discussion and sharing reminded me once again how restrictive, fragmentary, and intentional information we got from media is. Scrutinizing is mandatory, and also the education of media literacy

as well. We have to know and understand that hidden, unreported facts and voices are existed, and people who are living there. People sometimes do not have ways to reach the real information, and as a result of this, people become easy to be brainwashed by those information, and only wrong images or false rumors are spreaded. The original core issue is overlapped again and again like bubbles, and then, it does not keep the original shape anymore. These bubbles make higher walls among innocent people or promote justification of violent acts under the name of the religion, nationalities or even the name of God.

Each reaction of Israelis and Palestinians for what Japanese had never cared about was fresh for me. There was an opinion that the Japanese should have directly expressed their thoughts or feelings more. This occasionally causes misunderstanding even among Japanese, but they almost share the sense that their thoughts or feelings are not what they should always say aloud. If negative ones come up, they often keep them in their minds. Not only cultural

or habitual differences but also the even tiny things which come from each one's different background environment, gave me opportunities to consider what "normal" is. Actually, this experience of knowing and sharing the different sense was very interesting to me, and I enjoyed a lot.

When in Japan, it is easy to ignore and put aside what is going on in the place far from Japan, or where I have never been to. That is why I want to keep having the courage to take actions before I stop thinking. In modern society with extra enough biased information, I have to keep in mind that there is prejudice comes from misunderstanding and ignorance, and each one's background story which can never be majored by numbers or statistics. "Peace", "Justice," it is very easy to say aloud without considering anything. However, I always want to ask myself and ask the world "for who" and "for what." The world is created by people, and after all, the relationship between each one of them has the most reliable power to make a better world. I want to be a starter to spread positive chains to the people around me.

石塚 花音 Ayane ISHIZUKA

●日本 20 歳
●Japanese 20 years old

大学生
University Student

私が今回のプロジェクトに期待していたものは、紛争解決や平和構築がどれほど大変であり難しいのかを体験し、認識するためである。この春、紛争地とされるイスラエルとパレスチナに実際行った。また現在私は、パレスチナで人道支援を行う NGO でインターンをしていることから、紛争とはなにか、どうすれば解決するのかについて考えていた。そのため今回の目的は、紛争地に住む彼らと第三者の日本がどのように平和構築したらよいのか知るためである。そしてこの期待はもちろん達成された。紛争にはさまざまな要素があり私たちだけで何かできるものではない。しかし、今回の約 2 週間の生活での衝突や誤解は、会話と相手の心に寄り添うことによって乗り越えられた。とは言え、それらは簡単なものではなかったため、大変さをもまた実感した。

物事を達成するには、一人だけでは何もできず、さまざまな人の力を借りることも大切であることを学んだ。また助けてもらうことは当たり前ではないこと

も身をもって実感した。言語や性格の違いを理由に距離を置くのではなく、常に人と真剣に向き合うことが何よりも大切なことを学んだ。個々の理想は異なるが、その違いを受け入れることができれば人はわかりあうことができる。これは私が将来生きていくうえで、大事で貴重な体験となるだろう。

物事を考えるには、一つの情報だけでは足りない。日本の多くのメディアは極端な事件しか報道しないため多くの偏見がある。今回のプロジェクトで情報がどれだけ重要なのかを学んだ。そのため私は、メディアが報道しない社会問題を現地の人々の声として伝えるメディアを作りたいと思う。日本の人は自分と異質なものとのかの関わりを避ける傾向がある。しかし私は人と人との関わりによって世界は成り立っている



と考え、この関わりを大切にするメディアを作りたい。

主にイスラエルの人は自分の感情を言葉で表現する。直球で物事を言う文化は、日本とは異なる。私は日本で、他人の表情から感情を読み取ることを学んだ。また他の人が思っていることを想像することを学んだ。しかし彼らは、それらは言葉で伝える。

この違いから、私は自分の感情や意見を言葉で表現する大切さを学んだが、同時に日本人の他者の気持ちを思いやる気風も大切にしていきたい。

性格や背景、また好みも異なる人同士が同じ地域に住むなら、衝突は避けようもない。しかし衝突を恐れず、関わりをもち続けることが平和構築にとって大切なのではないだろうか。自分だけが正しいと思いき相手のことを無視するのではなく、分かりあう努力をし続けることが大切だと、今回の共同生活で学んだ。

自分が傷つくことを恐れているのは、本当の意味での平和は訪れない。そのため、さまざまな人と会話することを恐れずに、また一つの情報だけで満足をしないことが必要であろう。直接現地に行くことも一つの手だ。これからは自分の足りない部分も受け入れつつも、自分の考えを大切に発信していきたいと思う。そして助けてくれる人、周りの人に感謝を忘れずに日々の生活を一生懸命生きていきたい。

Before I joined this project, I expected to understand how difficult and hard it is to achieve the solving conflicts and peace building. I went to Israel and Palestine, which are regarded as the conflict area, in spring. I'm thinking how to resolve conflicts through this experience and internship at NGOs that provide humanitarian assistance in the world concluded Palestine. Therefore, my purpose of this project was to know how we can build the peace bridge. About my expectation, it was achieved. There are various elements in occurring conflicts. I learned to overcome conflicts and misunderstandings only by communication and cooperation. It was not easy and I didn't think I could have done. But I could achieve the first step for the peace building.

Many people helped me to achieve something in this project. I could not do this by myself. But I shouldn't take it for granted. I should be kind to others and I want to be others helps.

If I have problems because of the difference of languages and personality, I must face people directly rather than keeping a distance and ignoring them. Everyone has each idea then I can't understand everything. But I can accept the difference even if I am under the conflicts. This experience will help me to live and to form my thinking in the future.

It is not enough information to know the real situation in Japan. Many Japanese people have prejudices because Japanese media report only extreme cases. I think the information is important to form ways of thinking. Of course, not only the information forms ways of thinking but we should know many situations in the world to eliminate prejudices and preconceptions. For that reason, I would like to create a media that reports social problems and focuses on local people's voices. People in Japan tend to ignore something indirectly related to their selves. I think that there are many relationships in the world even if I can't look. I would like to create a media that values this relationship.

Most of Israeli and Palestinian express their emotions directly. This is different from Japanese. Japanese are likely to keep it all inside then explode their emotion. In Japan, I learned to read others face and thoughts. For them it tells in words. Firstly I confused this difference and felt stress, but it is important to tell directly to communicate and understand others. I would like to express my emotions in words while considering other's feelings.

It is usual to occur conflicts when people having different personalities, backgrounds and preferences live together. But it is important to keep touch with them not to break relationships because of being afraid of conflicts and being hurt. Therefore, for understanding others, it is necessary to talk and know the information, focused on many cases. Visiting directly also works.

I try to accept my weakness while I have confidence in my goodness, feeling and my sense of value. I also do actions with brave. And I won't forget to thank people who help me, then I want to live my life hardly. That's all I learned and felt from this project.

東條 慎之佑 Shinnosuke TOJO

●日本 24歳
●Japanese 24 years old

大学院生
Graduate Student

本プロジェクトはイスラエルとパレスチナの紛争について理解を深める、又とない機会になった。本プロジェクトで考えさせられたことについて二点述べたい。

第一に、共同生活の中でのミス・コミュニケーションである。共同生活は、参加者それぞれの思いやりや協働があって成り立つものであり、互いに対する深い理解を得る場になった。しかし、文化や精神性をはじめ多様な背景からなる生活の中で、些細な誤解が、時に「衝突」に転じることもあった。私の場合、十分に自分の気持ちを伝えられなかったことも少なくなかった。イスラエル・パレスチナ側からも「日本人は何を考えているかわかりにくい。」と言われた。伝えるべきところで自分の気持ちを表明するのを怠っていたのである。共同生活の中での「衝突」は、後で振り返れば笑い草になる程度のものばかりであったが、現実の紛争と構図は同じではないだろうか。些細なミス・コミュニケーションが紛争の火種に発展してしまうことを、身をもって痛感したのである。

第二に、異なる境遇に対する共感の重要性である。長野でも東京でもずっと多くの議論をした。中には痛みを伴う紛争経験の告白などセンシティブな内容を含み、時には激論にもなった。しかし、共同生活で互いの距離が縮まるにつれ、互いの話を真摯に受け止め、みんなで分かち合う態度が実践された。

長野では各参加者から意見が矢継ぎ早に飛び、議論が一時過熱する事態もあったが、JICAに移ってからの議論は互いの意見に耳を傾ける姿勢が徹底されていた。私も自分の考えを相対化したり、他者の視点を獲得したりすることで、他者への共感を深めようと努めた。共感を通じて、異なる境遇にかかわらず、互いに痛みを分かち合い、前に進むことができるのである。

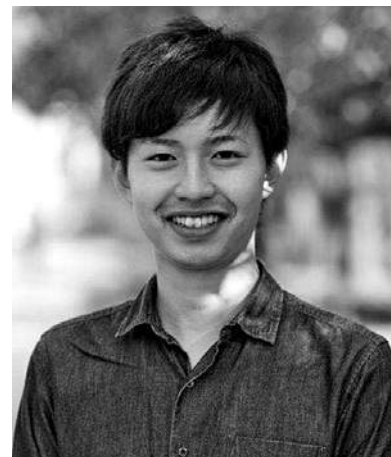
このプロジェクトがなければ、出会えなかった多くの友人とつながりを持った。私を含め参加者は平和を願い、意識を変化させていった。たとえ赤子のようなおぼつかない小さな一歩でも、それが変化

への流れを決定づけると私は信じている。哲学者プラトンも次のように述べる。「最初の一步が肝心だ。幼くても未熟なものに接するときなどは特にそうだ。徐々に形がまとまり、何らかの刻印が痕跡となって永遠に残るのはまさにこのときなのである。」それぞれの平和に対する小さな献身が変化の兆しになることを切に願う。

This project was a good opportunity to deepen my understanding of the conflict between Israel and Palestine. I would like to say the following two points here which I thought about through this project.

First one is the miscommunications in the communal life. On the one hand, we could not live communally without each one's efforts to care others and cooperation, and it was good experience to understand each other deeply. On the other hand, everyone has various backgrounds and mentalities. Some "collisions" arose from trifling misunderstandings in the diversified life. Actually I sometimes didn't fully express my feelings, keeping them in mind. Israelis and Palestinians also said, "I don't know what Japanese are thinking". It made me realize that I neglected expressing my feelings when I should had done. Looking back the days of the communal life, although "collisions" we encountered were just a kind of laughingstock, its situation seems same as conflicts in the real. So now I keenly feel that conflicts can arise from misunderstandings.

Second one is the importance of empathy to those who are in different circumstances. We had a lot of discussions in Nagano and Tokyo. In the discussion, someone talked to us about painful experiences to share and some of them could be sensitive topics on the problematic situation



between Israel and Palestine. Sometimes we had heated discussions. However, while we got closer, each of us attended to the conversations with more humbleness and respect and devoted ourselves to sharing pains together. At first, we poured out opinions and then the discussion got overheated once in Nagano. But after moving to JICA, conversations were quite rational, and everyone also paid much more attention for listening to others. Therefore, I also made more efforts to feel empathy to others, apart from my own standpoint and gaining other's perspectives. I think through empathy to others, we can share pains and step forward.

Through this project, I met a lot of new friends that I wouldn't meet otherwise. And participants including myself have hoped for the peace and changed minds. I believe even a small and unsteady step like a baby could be definitive to the beginning of the change. Philosopher Plato once said: "the beginning is the most important part of any work, especially in the case of a young and tender thing; for that is the time at which the character is being formed and the desired impression is more readily taken". I hope the change will be begun with each one's small commitment to the peace.



1. 飯綱高原の湖畔で、子どもたちとともに、音楽に合わせて癒やしのひととき
By the lake of Iizuna Highland, we had a wonderful healing moment with children dancing to the music.
2. 折り紙に挑戦
Challenge to ORIGAMI
3. 「平和の架け橋」国際文化交流会で、イスラエル・パレスチナについての説明(長野ボランティアセンター)
Presentation about Israel & Palestine at the Peace Bridge Cultural Exchange (Nagano Volunteer Center)
4. シンポジウムで、ご出席の方々とグループディスカッション (Group discussion at the Symposium (JICA Tokyo International Center))
5. JICAでのワークショップ (シンポジウムの準備)
A scene of workshop in JICA (Preparation of Symposium)

スタッフの声

Voices of the Staff

福島 貴和 Takakazu FUKUSHIMA

- 信州善光寺玄証院 住職、認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会 理事
- Buddhist chief priest of Shinshu Zenkō-ji, Genshō-in
- Director of NPO Helping Children in the Holy Land

いかに平和のうちに共存して生きるか

今回、長野での本プロジェクトも3年目となりました。これまでの市民との関わりと言えば、文化交流会での、音楽、踊り、食事会などでした。長野の人々にとって「交流会」の意味は、遠い国の文化にちょっと触れたという以外にはなかったのではないのでしょうか。そうではなくて彼らの国は今大変な紛争(戦争)状態であり、このプロジェクトは、平和の架け橋を築くプロジェクトなのだということを、参加者全員で熱心に語ってほしい、と私は考えてきました。

日本人は、私より10歳くらい年上でないと戦争を知りません。戦争の悲惨さはよく聞くけれども、経験のない我々にとっては全くの人ごとであると思います。悲惨な目に遭わないにこしたことはありませんが、日本以外、紛争はそこら中で起こっており、人が死んでいます。この状況は同じ人間として看過できません。長野市民にそのことを知らせてあげたい、平和を貪っていいのかと聞きたい。

長野でのプロジェクトの開催を受け入れたのも、こういう思いからでした。3年目には紛争地帯から来た若者達がどう考えているのか直に話を聞きたい。これが今年の最大の目標でした。

市民の評判はすごく良いことがわかりました。今年は良かったよという意見が圧倒的でした。私の中では、もう少し踏み込んで話をしてほしかったという思いはありますが、彼らには彼らの事情があることはよく理解しているつもりです。

もし、来年も長野で開催されるなら、長野市民の中からも「世界平和に我々も貢献したい」という方々が多く出てくるようなプロジェクトになればいいなと思います。長野市民はどちらかというとおとなしい人たちで、自分から積極的に関わることは苦手です。しかし、我々の存在価値は、いかに互いに平和のう

ちに共存していけるかにあります。一人でも多くの市民が平和のために立ち上がることを願っています。



How to live in peace and harmony

The project in Nagano is already at its third year. So far, citizens have participated in all kinds of cultural exchange activities from music and dancing to eating meals together. It had seemed that for the Japanese participants, the act of cultural exchange meant nothing more than short interactions with foreign cultures. Even so, I came to think that the project would be an opportunity to build bridges and allow participants to eagerly discuss issues and conflicts in other countries.

The Japanese participants who were even about ten years older than me didn't know much about war. Though we hear about the tragedy that takes place, none of us had ever experienced it firsthand. But whether or not we see it ourselves, there are still people today outside Japan who are dying in war. We simply cannot overlook this travesty as fellow human beings. I want to inform the citizens of Nagano of these issues, and ask if we should be taking our peace for granted.

It is from this thought that our project in Nagano came to be. For our third year, our biggest goal is to hear the experiences of young people living through war directly.

I've heard positive reactions from the public—unlike before, this year the response is overwhelmingly supportive. While we have an opportunity to learn more, I believe that our guests will also be able to reflect more about their circumstances.

If we can host this project in Nagano again next year, I hope we can inspire many more people to come out and express their desire to contribute to world peace. The citizens of Nagano often keep to themselves, and have few opportunities to involve

themselves to causes. But our worth as human beings lies in how well we are able to coexist. I hope that as many people as possible will stand up for peace and help build a better world.



田制 則子 Noriko TASEI

- 認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会理事
- Director of NPO Helping Children in the Holy Land

「平和の架け橋」その名のとおりイスラエル、パレスチナ、日本の若者達が純粹に、そして真剣に紛争地イスラエルの平和を願う自分達がどう行動するかを、寝食を共にして生活するなかで模索する集まりです。

毎回感じるのですが、最も解決困難と思われる紛争についてひとつのテーブルに着くのは、まれに見る若者たちです。

私は自分自身を省みれば、平和な日本に住んでいる、いわゆる平和ボケの一人でした。イスラエルの紛争についてまったく興味も知識も無く、定年を迎えて数年後、理事長・井上弘子さんに出会い私の人生が変わりました。

長い歴史の中で幾度も繰り返されてきた紛争、そして今も、紛争の中で生きている人々を見て、私のできることは何かと考えました。それはイスラエルで現実に起こっていることを私の周りの人たちに語りその輪を広げ、一人でも多くの方に関心を持ってもらうことだと思いました。

今回イスラエルの元兵士と、常にイスラエルの監視下で生活しているガザの若者が平和について語り合えたことは、このプロジェクトをいろいろな形でご支援助くださる多くの皆様の支援の賜と感謝しています。

“Peace Bridge” Project is, as its name suggests, a gathering of Israeli, Palestinian, and Japanese youths who sincerely hope for peace in the Holy

Land. Through the experience of communal life, these young participants ponder what they can do to realize peace.

It is truly a rare opportunity to see these young men and women from one of the harshest conflict sites sitting together at a table and discussing the conflict.

I had lived in peaceful Japan and had taken peace for granted. I had had neither interest nor knowledge of the Israeli-Palestinian conflict. My life changed when I met the organization’s director Hiroko Inoue a few years after my retirement.

Learning about numbers of conflicts that has happened in the history and meeting people who have survived them, I wonder how I can help. My answer to this question is to spread stories of the conflict and invite people to think about what is happening in Israel and Palestine,

I believe that the opportunity for former Israeli soldiers and a young Gazan who lives under Israeli surveillance could interact was a great gift. I would like to thank the donors and supporters for realizing such an opportunity.



飯綱高原で、楽しい、おいしいソーバーベキュー
Pleasant and delicious barbecue on the Iizuna Highland

浅野 耕二 Koji ASANO

- 認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会 事務局長
- Secretary-General of NPO Helping Children in the Holy Land

共同生活やワークショップをとおして、文化の違いや紛争などの事を学ぶことが、私たちのプロジェクトの目的の一つである。それはとても重要なことである。しかし、今回のプロジェクトをとおして、それ以上に大切だと感じたのは、人を思いやる優しい心を持つということである。

プロジェクト中、参加者から喜怒哀楽といった様々な感情の変化を感じることができた。長野の街をみんなで散策して楽しんだ。また、みんなで一つのものを作り上げて喜んだ。このようなプラスの感情はとても大切だと感じる。しかし、プラスの感情を参加者から感じ取った反面、参加者の言葉や表情から、苦しみや悲しみ、悔しさを感じたこともあった。このような感情もプラスの感情と同様に大切だと思う。なぜなら、人は、痛みや苦しみをすることで、憎しみにも優しさにも変えることができる。その痛みや悲しみを知ったからこそ、同じ事を大切な人にならないよう、人を思いやる優しい心をもつことができる。そして、同じような境遇の人に声をかけることができると思う。プロジェクト中では、実際に参加者同士が相手を思いやり、優しく接している光景を見て、心を打たれたこともあった。

今回、参加者はさまざまな感情の変化により、新たな発見があったのではなかろうか。結果の善し悪しにかかわらず、その体験から何を学んだかを着目してほしいと思う。かく言う私も、さまざまな感情が生じた。そして、悔しい思いもした。私自身、その経験や思いを色あせず、成長の糧にしたいと思う。

最後に、これからの輝かしい未来がある参加者のみんなには、優しさと心の強さを兼ね備えた今以上に素晴らしい人となってくれることを楽しみにしている。

ご報告を終えるに当たり、3か国の参加者をはじめ、支援者の皆様、協力・応援して下さいました多くの皆様に感謝申し上げます。

One of the purposes of our project is to learn the cultural differences and about the conflict through communal living and workshops. Achieving this purpose is important. Yet, I learned from this year's project that what is even more significant is compassion and empathy.

During the project, I could see the participants' various emotional transitions. We all walked around the city of Nagano. We also created a single project together. These are all positive emotions. At the same time, however, I also learned that the participants lived with pain, sorrow and frustrations. And I believe that these emotions are as important as positive emotions. By knowing pain and hurt, humans are able to turn hatred into kindness. By knowing pain and sorrow, we are able to have compassion towards others, in order not to put others in the same painful situation. We can also reach out to those in challenging situations. Throughout the project, I was touched and moved by the scenes where the participants acting empathetically and kindly to one another.

I think that the participants made new discoveries from the various emotions they felt during the project. I want them to focus on what they learned from the process, not just the outcomes. I also went through different feelings, not only happy ones. I, too, want to turn these experiences and feelings into my personal growth.

Finally, I would like to wish all the participants, who have bright futures awaiting them, to become kinder and stronger. I would also like to convey my deepest appreciations to all the donors, supporters, and the participants.



長野・ホストファミリーからの声

Voices of the Host Families in Nagano

大野 みどり

Midori OHNO

今回初めて「平和の架け橋」プロジェクト参加者一人のホームステイを引き受けました。これまでの紛争のニュースからは、イスラエルとパレスチナの青年が、同じプログラムに参加しているなど、とても信じられませんでした。

我が家にはナルキスがやってきました。彼女はとても明るく、わが家の小学1年の長女と、幼稚園の次女の面倒もよくみてくれましたし、子どもたちもナルキスによくなつきました。長女の夏休みの日記の一文にもナルキスが来てくれたことが書かれており、「楽しかったことは全部です」とのこと。本当に全部が楽しかったようです。

印象的だったのは、ナルキスが「人がたくさん集まる所は怖い…」、「お風呂などもいつテロがあるかと思うとゆっくり入れない」と話していたことです。明るいナルキスですが、心の中はいつもテロに怯えているのだと感じました。

ナルキスが帰った後、子どもたちと改めて戦争の話をしました。子どもには、まだまだ難しいことありますが、家族で考えるよい時間となりました。また、子どもたちにとっても、日本とは違ういろいろな国があり、交流が大切だということを学ぶよい機会となりました。

ありがとうございました。

This was the first time that I hosted a participant of the “Bridge of Peace” project. Given the news of the conflict, it was almost unbelievable that young men and women from both Palestine and Israel were participating in the same program.

We hosted Narkis, an incredibly bright and kind young woman. She got along well with our two daughters, who were quite taken with her. In fact, our daughter wrote in her school journal that she had a lot of fun with Narkis. We were inclined to agree—it truly was fun having her.

Narkis would tell us that she gets nervous in crowded areas, or that she can never take her time in the bath out of her instinctive fear of terror attacks. Despite her cheerful exterior, we could see that terrorism troubled her constantly, leaving her heart heavy with worry.

After Narkis left, we talked to our daughters about the conflict once again. While it’s still a difficult topic for children to handle, it was a good means for us to come together as a family. It was also an opportunity to explain to our children that there are many other countries around the world, and that exchange between our communities was an important way of learning.

Thank you very much.

寺沢 雅子

Masako TERAZAWA

縁あって、今年で3回連続、「平和の架け橋プロジェクト」の参加者一人をホストファミリーとして受け入れさせていただきました。

毎回違う個性の方ですが、みな日本にとっても興味があり、何でもチャレンジしてくれるので、こちらもとても楽しく過ごさせてもらいました。また何と言っても、現地の様子を新聞やテレビを通してではなく、当事者の生の声で聞くことができたので、とても貴重な時間でした。

幸い、今年は、ホームステイ実施日が「平和の架け橋交流会」の後だったので、とてもよかったと思っています。交流会では、プロジェクトの意義をよく理解することができましたし、しかも一人ひとりの思いを発表する時間がありました。だから家に迎える青年がどんな思いを持っているかわかっていたので、より踏み込んだ話を聞くことができました。

我が家に来てくれたラウイは、とても優しく素直な好青年で、こちらが勧めることは何でもトライしてくれ、2日目の朝は地区の観音堂のお掃除当番も一緒に行っ

てくれました。イスラエルの青年が日本の神様のために働いてくれたことに感慨を覚えました。

高校生の娘と、イスラエルの状況を聞いたり、アラビア語を教してもらったり、夜遅くまで語り合ったり、とても意義深いひとときでした。

私たちにとって今ではイスラエルは遠い国ではなく、「ラウイの国」で、イスラエル・パレスチナ問題は他人事ではなくなりました。受け入れをさせていただいたことで、2国間の平和を心から願うようになりました。

今後も、このプロジェクトが長く続いていくことを祈念しております。お世話になりました。

ありがとうございました。

This is our third consecutive year taking in a participant of the "Peace Bridge Project" project as a host family. Each time we get someone different, but they have all been interested in Japan and willing to try out new things, so I've enjoyed myself as well. Moreover, I was able to hear eyewitness accounts of the situation back home that you could not learn from a TV or newspaper. I thought hearing the voices of those experiencing the conflict directly was a valuable experience.

Fortunately, this year's homestay took place after the cultural exchange meeting of the "Peace Bridge Project". At the meeting, we were able to learn about the project's significance and hear each person's thoughts, so when they arrive at our homes, we already knew their impressions and could discuss them at even greater depth.

We hosted Rawi, a gentle and honest young man from Israel with an adventurous spirit. He was willing to try out anything. In fact, on his second morning with us, he decided to join us for our cleaning duties at the district's temple. That Israeli boy would offer his work for a Japanese god was truly inspiring to me.

Seeing our daughter ask Rawi about the situation in Israel, learn Arabic phrases from him, and stay up at night just to talk to him felt very meaningful to us. For us, Israel was not a distant country, but Rawi's country, and the conflict between Israel and Palestine no longer felt like a foreign problem beyond our concern. I began to accept it myself, and prayed for peace between the two countries.

I hope that the "Bridge of Project" project can continue for many years. I am grateful for the opportunity to participate.

東澤 啓子 Keiko HIGASHIZAWA

我が家に来てくれたのは、笑顔がすてきな、超かっこいいオハド・ナヴォン君でした。

「とにかく楽しい奴だった」、これが家族の一致した感想です。

世界中を旅して歩いている彼のすてきな話や、彼が撮った動画はとて興味深く、楽しくて、一泊だけのホームステイなのがとても残念に思いました。また日本に、我が家に来てくださいね!

ユダヤ人の方がホームステイに来るのは初めてだったので、どんなことに気を付けなければいけないかと、前もっていろいろ調べました。しかしオハド君は、自分とは違う文化や食習慣を柔軟に受け入れて、楽しんでくれました。彼の姿勢は、世界を旅して来たからこそと感心しました。

身体も心もでっかいオハド君は、我が家の人気者です。今でも彼の事が家では話題になります。彼のブログを見て、今どこで何をしているのかと気にしています。元気で旅を続けてください。

そして「善き隣人」をたくさん増やして、世界で友情の輪を拡げていってください。

最後にこの活動を支えてくださっている皆様に感謝します。そして『平和の架け橋』が実を結ぶことを祈っています。

We hosted Ohad Navon, a charismatic young man with a wonderful smile. When we first saw him, our impression was, "He seems like a fun guy!"

I thought it was too bad that he was only staying with us for a night! In the short time we had him, he told us incredible stories about his travels around the world and showed us some interesting films that he shot himself. Next time he's in Japan, I do hope he'll stay with us again!

This was the first time we hosted someone Jewish, so before he had arrived, I made sure to check if there was anything we needed to be careful about. But Ohad was very flexible with his eating habits, and in fact seemed to enjoy trying new foods from a different culture. I admired his open attitude, and it was obvious that he was used to traveling to all kinds

of places.

With his great heart and stature, Ohad was very popular at our house. Even now, he comes up in our conversations at home. We follow his blog to check up on what he's up to and where he's been.

I hope that he can continue his journey in good health. I also hope that he can continue to meet all kinds of people and extend his friendship around the world. Finally, I'm grateful to everyone who had a part in organizing and supporting these activities. I believe that the "Bridge of Peace" project will bear fruit.

伊藤 絵美 Emi ITO

我が家は、イスラエルから来たアシールと2日間を一緒に過ごしました。まず、「平和の架け橋交流会」での一人ひとりの平和のメッセージに圧倒されたことを、強く覚えています。彼らの言う「平和」という言葉の持つ重みが私たちのとは全く違い、このプロジェクトをとおして真摯に向き合おうとする彼らの姿勢が印象的でした。

アシールは、ウェルカムカードを持って恐る恐る近づくと息子を、笑顔いっぱいで見つけてくれました。

慣れない日本の家庭生活を興味津々で体験し、短い時間でしたが、たくさん話をすることができました。近所に住む私の友人ともすぐに意気投合し、言葉の壁を感じさせない打ち解けぶりでした。

自宅で、息子の友だちとみんなで日本の夏祭りしよう!ということになりましたが、準備をしながらの、のんびり話した時間は、とても貴重な時でした。

「自分の国が平和だったことはない。戦争がない生活を私は知らない。大きな問題だけど、小さなことを一つひとつ解決していくことでしか、大きな問題は解決しないと私は思う。誰しもが公平に暮らせるように私は働きたい。だからこれからも勉強します」「日本のいいところは、誰もがなんでも話せる自由があるところ」と、話してくれたことは忘れられません。

我が家の「祭り」では、法被を着て、かき氷や流しそうめん、射的に水ヨーヨーなどを、みんなで楽しみました。無邪気に笑って遊ぶ子どもたちを、彼女はど

んな気持ちで見たのでしょうか。

短い時間でしたが、とてもいい時間を過ごすことができました。

彼女に幸せになってほしい、と心から願っています。夢をかなえ、いつか再会できたら本当に嬉しく思います。

Aseel from Israel stayed at our house for two days. But first I wanted to share how I was overwhelmed by the messages of peace that the participants shared at the "Bridge of Peace" exchange meeting. I realized that the weight that the word peace carried for these young men and women was vastly different from our way of thinking—I was truly moved by the sincerity with which they approached the project.

Aseel approached us with a big smile when we first met her. Even though she couldn't stay with us for long, she was curious and open about experiencing a different kind of family life, so we were able to talk about all sorts of things. When a friend came to visit, I felt like there was no barrier between Aseel and us as we spoke amicably.

During her stay, my son and his friends decided that we would host a summer festival at our house. The time that Aseel and I were able to spend chatting while slowly getting ready felt very precious to me. We discussed a number of things that I don't think I'll ever forget. She said, "There's no peace in my own country. I have never known what it's like to live without war. It's a big problem, but if you can fix things little by little, one at a time, I think even a big problem can be solved. I want to work so that everyone can live fairly. That's why I'm studying as much as I can." She also added, "A good thing about Japan is that everyone has the freedom to talk about anything they want."

At our little "festival," Aseel wore a happi, ate shaved ice and sōmen, played with yo-yo balloons, and enjoyed herself with everyone else. I wonder what she felt as she watched the children play without a care in the world?

Her time with us was short, but I think we spent it well together. I truly hope that she can find happiness in her life and that all her wishes come true. I think it would be wonderful if we could someday meet again.

森 ゆかこ Yukako MORI

パレスチナのナディーヌがホームステイで我が家に来てくれて、私たちは全く知らない世界のことを少し知ることができました。そして、そこに住む人々が平和な暮らしができるように願い、私にできることは何かを考えるキッカケになりました。子どもたちとともに大変貴重な経験ができました。ありがとうございます。

We hosted Nadine from Palestine at our house, and were able to learn a little bit about a world we knew nothing about. We racked our brains thinking about the ways we could help the people from her country live more peacefully. I think my children and I had an incredibly valuable experience. Thank you so much.

北沢 美和子 Miwako KITAZAWA

我が家に来てくれたシーラは、日本がとっても大好きなかわいい女の子でした。日本語も話せたので、わが家の2歳の子とひらがなやカタカナを読んだり、日本語で話しかけてくれたり、子どももお姉さんができて、とても嬉しそうでした。

何でも素直に喜んでくれて、本当に日本が好きなのだ、こちらまでとっても嬉しくなりました。

温泉に誘うと、憧れていたようで、とても喜んでくれました。

そんなシーラも、兵役を終えて来て、常に戦争と隣り合わせの環境に生きていることを聞き、日本で平和に慣れきった自分にはなかなか想像のできない現実を知りました。

世界を知り、平和のありがたさについて考えるよい機会になりました。

We were able to host Shira, a sweet girl who really loves Japan. Since she knew some Japanese, she read

hiragana and katakana and spoke to our two-year-old baby, who was quite happy to have made a new sister.

Shira seemed to genuinely be happy through her entire stay—she really does seem to love everything about Japan. When I invited her to a hot spring, I was pleased to see that she was excited to try it out. Her good humor was contagious, and I found myself sharing her happiness.

I learned that Shira had finished her military service and lived in an area that had been suffering through the war. Having lived so peacefully in Japan, I realized that I could hardly imagine such a reality myself.

This was an important opportunity to not only learn more about the world, but also feel gratitude for the peaceful life I have been lucky enough to live.

田仲 晶子 Akiko TANAKA

「人はそれぞれ違う」のは当たり前

今年も、交流会と、ホームステイのホストファミリーとして参加させていただきました。

毎年、青年を受け入れる時に心配するのが「食事」です。どんな方が来るか事前にわからないので、考え得る「イスラム教」「ユダヤ教」などの食事制限についてリサーチします。「食事制限のある人なら、このプランで。なんでも食べられる人ならこのプランでいこう」と、2パターンを考えたりします。

今年来てくださったイムリさんはユダヤ教徒でしたが、なんでも食べられる方で、間違って禁止のものを食べさせてしまう心配がなくほっとしました。

一緒にお祭りで屋台めぐり、花火をし、スイカ割り、お盆のお棚作り、大本営地下壕の見学や生け花の体験もしてもらいました。強行日程すぎてイムリさんは疲れてしまったかもしれない…とあとで反省もしました。生け花がとても気に入ってくださったと聞き、私たちもとても嬉しい気持ちになりました。いつか来日した際には、ぜひまたお会いしたいです。

イムリさんとは宗教やイスラエルでの生活、国の様子などの話をたくさんしました。人の話を聞くのはとて

も興味深いもので、昨年の青年と同じ話題でも、話し手が変われば違った温度・角度の話の聞くことができます。お話をして「イスラエル人」全員が同じではないと実感を持って理解することができました。そして「人はそれぞれ違うと頭ではわかっている、肚に落ちるには至っていない。どうしても何かの枠にはめて見ようとしてしまう」ことを自覚しました。

私たち日本人が「東アジアの方なら、中国料理を作れますよね?」と訊かれれば、「いやそんな、日本人なのでできませんよ、東アジアといっても広いのですから」と言うでしょう。

でも私は「イスラエルから来た」「パレスチナから来た」「中東から来た」と聞いて、簡単に「敬虔でお酒も飲まず、お祈りをして、食事制限が厳しい」という人物像を思い浮かべていたのです。

同じようにイムリさんたち参加者も「相手を国籍や宗教、居住地により一括りで判断するのではなく、一人の人間として理解していく」ことを、このプロジェクトで学んだのだと思います。1日ではありましたが、ホストとしてこのプロジェクトに参加させていただいたことは、私たちも多様性や共通性について考えるきっかけとなりました。

それは、ここ日本での日々の暮らしの中で、わずかに1日で考えられることではありません。今年も大変貴重な機会をいただきました。本当にありがとうございました。

Of course, "Every individual is different."

Once again, I was invited to participate in the "Bridge of Peace" project as a homestay host. Every year, when it's time for me to take in someone new, I worry especially about the food—since I don't have any information about my guest in advance, I end up researching dietary restrictions in Islam and Judaism and come up with a few courses of action. "If they don't have any dietary restrictions, I will do this," I think to myself. "But if they have any dietary restrictions, I will do that instead." This year, though, I was joined by Imry, who was Jewish but still ate whatever he liked, so I didn't have to worry about feeding him the wrong thing by mistake!

Together, we passed through stalls at a summer festival, watched fireworks, ate watermelon, toured the neighborhood, visited underground shelters, tried flower arrangement, and tried a bunch of other

experiences together. Now that I think of it, since we scheduled so many activities, Imry must have been exhausted. But I was glad to see that he really enjoyed flower arranging. If he ever comes back to Japan, I would love to see him again.

Imry and I were able to talk a lot about religion, life in Israel, his impression of Japan, and all sorts of other things. I'm fascinated by other people's stories. Even though we discussed some of the same topics as I had with my guest last year, hearing from someone else means approaching the conversation from a totally different perspective. In talking to Imry, I realized that there isn't just one kind of Israeli experience. That sounds obvious, but even if you know that for a fact, it's another thing to really understand it.

As Japanese people, when we hear something like, "Since you're East Asian, you must know how to cook Chinese food," of course we would protest, saying that East Asia is too vast to make such a generalization. But when I hear, "He's from Israel" or "He's from Palestine" or "He's from the Middle East," I tend to assume that he must have strict dietary restrictions, or that he doesn't drink, or prays five times a day.

Thanks to the "Bridge of Peace" project and especially Imry, I realized that I should see others as human beings instead of making judgments based on nationality, religion, or how and where they live. Although I could only spend a day as Imry's host, I think I've started thinking a lot more about diversity and commonality. And I've realized that if I hadn't participated in the project, I might have gone living my life in Japan without thinking about these things at all. I believe I'm lucky to have had such a valuable opportunity, and I'm incredibly grateful. Thank you so much.



初めての回転寿司(長野) おもしろい!おいしい!
The first experience of "Conveyor belt sushi"(Nagano). Cool!
Delicious!

7 名簿 Lists of names

プロジェクト参加者

責任者

井上 弘子
(認定NPO法人 聖地のこどもを支える会 理事長)

イスラエル／パレスチナ責任者・同行スタッフ

ヤクーブ・ガザウイ

日本側 スタッフ

井上 弘子 (実行委員長)
福島 貴和師 (実行委員・信州善光寺玄証院住職)
田制 則子 (実行委員)
浅野 耕二 (実行委員)

青年参加者

イスラエル

シーラ・バハット (女)
ナルキス・メヘラリエヴ (女)
イムリ・ゲフェン (男)
オハド・ナヴォン (男)

パレスチナ

アシール・ファルハット (女) (イスラエル国籍)
ラウイ・ビシャラ (男) (イスラエル国籍)
ラミ・アルジェルダ (男)
ナディーヌ・シャヒーン (女)

日本

石塚 花音 (女)
山田 百華 (女)
深田 莉映 (女)
金森 早紀 (女)
東條 慎之佑 (男)
梶原 裕史 (男)

Project Participants

General Representative

Hiroko INOUE
(President of NPO Helping Children in the Holy Land)

Responsible of Israeli and Palestinian Delegation

Yacoub GHAZZAWI

Japanese Staff

Hiroko INOUE (Director of Executive Committee)
Rev. Takakazu FUKUSHIMA
(Executive Committee /
Shinshu Zenko-ji, Gensho-in,
Buddhist chief priest)
Noriko TASEI (Executive Committee)
Koji ASANO (Executive Committee)

Young Participants

Israel

Shira BAHAT (F)
Narkis MEHRALIYEV (F)
Imry GEFEN (M)
Ohad NAVON (M)

Palestine

Jaseel FARHAT (F) (Israeli Nationality)
Rawi BISHARA (M) (Israeli Nationality)
Rami ALJELDA (M)
Nadine SHAHINE (F)

Japan

Ayane ISHIZUKA (F)
Momoka YAMADA (F)
Rie FUKADA (F)
Saki KANAMORI (F)
Shinnosuke TOJO (M)
Yuji KAJIWARA (M)

協力団体、協力者

イスラエル、パレスチナの共催団体

中東のための ヨハネ・パウロ II世 財団

(理事長 イブラヒム・ファルタス神父)

日本での協力団体、協力者

後援

独立行政法人 国際協力機構

在日イスラエル大使館

在日パレスチナ常駐総代表部

助成

公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団

協力

信州善光寺玄証院

株式会社フランストラベルセンター

長野市ボランティアセンター

竹内哲幽師 (曹洞宗)

ハンドベル・グループ ベルリンガース松代

聖パウロ修道会 若葉修道院

カトリック吉祥寺教会

渡部 朋子

(NPO 法人 ANT-Hiroshima 理事長)

鈴木 信一師

(聖パウロ修道会管区長)

ウィリアム・ネルソン師

大野 みどり

寺沢 雅子

東澤 啓子

伊藤 絵美

森 ゆかこ

北沢 美和子

田仲 晶子

能田 啓子

比嘉 依子

中尾 有希

講演会、チャリティー・イベント

出川 展恒 (NHK 解説委員)

家田 紀子 (藤原歌劇団 ソプラノ歌手)

瀧田 亮子 (ピアニスト)

シャディ・バシイ (神田アルミーナ・オーナーシェフ)

順不同 敬称略

Collaborators

Co-organizer in Israel/Palestine

John Paul II Foundation for the Middle East (NGO)

(President: Fr. Ibrahim FALTAS, OFM)

Sponsorship in Japan

Supported by :

Japan International Cooperation Agency

Embassy of Israel in Japan

Permanent General Mission of Palestine in Japan

Subsidized by :

Mitsubishi UFJ Foundation

Cooperated by :

Shinshu Zenko-ji, Gensho-in

France Travel Center S.A.

Nagano Volunteer Center

Rev. Setsuyu TAKEUCHI

Handbell Group, Bellringers Matsushiro

Society of St. Paul, Wakaba Convent

Catholic Church of Kichijoji

Tomoko WATANABE

(President of NPO ANT-Hiroshima)

Fr. Shinichi SUZUKI

(Provincial, Society of St. Paul)

Fr. William NELSON

Midori OHNO

Masako TERAZAWA

Keiko HIGASHIZAWA

Emi ITO

Yukako MORI

Miwako KITAZAWA

Akiko TANAKA

Keiko NODA

Yoriko HIGA

Yuuki NAKAO

Cooperators for Seminar, Charity Events

Nobuhisa DEGAWA (NHK News Commentator)

Noriko IEDA (Fujiwara Opera, Soprano)

Ryoko TAKITA (Pianist)

Shadi BASHIYI (AL MINA, Kanda)

(In random order)

支援団体と支援者 / Donators

一般支援団体 (19団体) Organizations

医療法人 白岩医院	女子跣足カルメル修道会
援助修道会 六甲修道院	聖フランシスコ病院修道女会 姫路修道院
お告げのフランシスコ姉妹会 ナザレ修道院	聖ベネディクト女子修道院
オタワ愛徳修道女会 一関修道院	聖心の布教姉妹会 本部
お告げのマリア修道会	日本キリスト教団 白鷺教会
カトリック行橋教会	ベタニア修道女会 江古田修道院
カトリック葛西教会 ゆりの会	マリアの御心会
厳律シトー会 那須の聖母修道院	目黒サレジオ幼稚園
坂出聖マルチン病院	レデンプトリスチン修道院
宗教法人 カトリックイエズス会	

一般支援者 (127名) Individuals

荒川 淑	大澤 由紀子	佐々木 ふみ子	長坪 光	三上 成子
天野 直秀	太田 晴子	佐藤 朝子	永野 明子	三島 八重子
安藤 眞樹	小田 淳	白水 明代	西勝 健夫	宮野 美智子
赤崎 克俊	小澤 知江子	鈴木 國弘	野田 健太郎	森本 明子
市川 黎子	小嶋 光恵	高島 文枝	野村 孝弘	本橋 淑子
伊藤 多恵子	奥西 美保子	田川 照子	橋本 和子	望月 美代乃
岩下 直子	岡島 順子	建部 正秋	林 一江	森 恵子
井上 ちひろ	磯部 裕子	立林 久美	半田 和巳	安田 美知子
井上 静子	加藤 喜代子	谷口 寿美枝	原科 節子	山田 千秋
伊藤 勝子	鎌田 まさ子	田中 伸枝	波多野 輝栄	安江 則子
石井 直子	川本 和子	田制 則子	平賀 徹夫	山本 勝也
石原 淳一	加地 貴美子	高馬 和子	平田 なみ子	山内 春治
飯島 喜久江	川村 栄子	谷山 正恵	深澤 美知子	山下 るみ子
石澤 雅士	川口 節子	高瀬 将章	深堀 初子	杠 愛子
井上 真弓	春日 圭子	田中 弘子	藤本 保子	吉川 八重子
岩館 和子	加納 貞彦	田口 加寿子	藤原 伸子	吉田 恵子
遠藤 恵美子	北原 豊子	田口 幾子	古本 佳世子	吉田 友一
遠藤 香恵子	木村 浩之	田中 博	福田 幸子	吉川 英子
遠藤 久夫	木村 靖子	手嶋 直美	福瀬 くに子	横道 昭光
江場 仁美	木村 護朗	寺田 京子	藤井 素子	吉田 良子
及川 幸子	黒滝 津哉子	出川 展恒	堀田 静穂	渡部 美佐子
大泉 廣	小塩 恒子	得田 照	本田 維憲	渡邊 公伸
大西 茂雄	後藤 幸	中島 敏夫	本間 早苗	Nguyen thi hoa
大八木 汎子	斉藤 直子	中野 幸子	本田 江身	
奥村 聡	佐藤 光子	中山 宏	堀 正巳	
小野 修	佐野 澄子	中小路 和子	増満 由美子	

(敬称略)

PROJECT REPORT

イスラエルーパレスチナー日本

平和の架け橋プロジェクト in 長野 2018

報告書



禅の初体験

The first experience of ZEN.

編集スタッフ

Editorial Staff

井上 弘子
浅野 耕二
佐藤 克裕

Hiroko INOUE
Koji ASANO
Katsuhiro SATOH

翻訳協力

Translation Staff

能田 啓子
比嘉 依子
中尾 有希
ウィリアム・ネルソン師

Keiko NODA
Yoriko HIGA
Yuuki NAKAO
Fr. William NELSON

写真提供

Photographers

井上 弘子
福島 貴和
浅野 耕二
佐藤 克裕
参加者

Hiroko INOUE
Takakazu FUKUSHIMA
Koji ASANO
Katsuhiro SATOH
Participants

平和の架け橋プロジェクト in 長野 2018 実行委員会

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX 03-6908-6571

URL <http://seichi-no-kodomo.org>

E-mail ispalejpn@gmail.com

John Paul II Foundation for the Middle East

Hebron Jerusalem Street 475, P.O.Box 24 Bethlehem

TEL (972) 2 274 55 57

FAX (972) 2 275 24 97

URL www.jpji.ps

E-mail info@jpji.ps

発行日 2018年12月1日



写真

表紙： 飯網高原：湖畔で、長野の子どもたちやボランティアの方々とプロジェクト参加者

裏表紙： シンポジウム後の記念写真：ご出席の支援者の方々とプロジェクト参加者

Cover photos

Front : Participants of the "Peace Bridge Project" with some children of Nagano and volunteers (Izuna Highland)

Rear : After the Symposium at JICA. Participants of the "Peace Bridge Project" with our supporters who were present.



認定NPO法人
聖地のこどもを支える会



John Paul II
foundation